
音楽を奏でて

鶴岡俊和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

音楽を奏でて

【Zコード】

Z0183E

【作者名】

鶴岡俊和

【あらすじ】

地球上で最も機械文明が発展しているダイヤグラム大陸。そこは昔、機械技術の独占によつて滅亡し、音楽によつて復活した大陸だつた。一度は機械がなくなつたものの、人々の欲が機械を再び大陸に呼び戻してしまつ。機械は今再び、人々に驚異をもたらそうとしていた。

第一章・壊れ始めた音楽

第一章 壊れ始めた音楽

いたるところの壁にゼンマイ仕掛けが施された巨大なドーム型のホールには、自分たちの最先端の技術を自慢げに説明する高官たちがあり、高価なドレスに身を包んだ貴婦人たちがよく理解もしてない機械技術に舌鼓を打ちながら、名のある妻の座を狙おうと高官達に目を光らせている。あちこちに設置されたテーブルの上には豪華な料理が並べられているが、誰もそれに手を付ける様子はなく、給仕が運んでくるワイングラスばかりがあつという間に空になってしまった。

ダイヤグラム大陸で最先端の機械技術を誇ることコントラスでは今、吹き抜けの巨大なホールの中で、過去の技術と現代の技術の集成、蒸気とゼンマイによる機械塔の完成披露宴が行われていた。 制作者や評論家、多くの著名人やマスコミが集まり、人間というのが持つ大きな可能性に感嘆の声を漏らしていた。

誰かの合図とともに建物の明かりが一斉に消えたかと思うと、蒸気とゼンマイが見計らつたかのように動き出し、明かりを灯し始めた。場内に盛大な拍手が沸き起こる。

しばらくして、髪をオイルでべたべたに固めた恰幅のいい男性が場を一旦静め、会場の右手側の扉から吟遊詩人の一団を招き入れた。大きな拍手と共に、ヴァイオリン、チェンバロ、バッグパイプなどを持った六人の吟遊詩人が現れ、高官たちの自慢していたゼンマイ仕掛けの壁の前に横一列に並んでいく。「メトラの有名な吟遊楽団の方々です」という紹介に併せて、吟遊詩人たちは順番に頭を下げた。ひそひそと聞こえてくる声を気にすることなく、ヴァイオリンを持つ詩人の合図で一斉に演奏が開始された。成功を歓迎するような軽やかな音色は、場内の人々の耳の中ではすみ、思わずリズム

に合わせて体が動きだす。言い争っていた高官たちも一寸口を閉じ、やがて手を取り合つて踊り始めた。

しかし演奏の途中で、バッグパイプを奏でていた詩人リード・メロディオンが、周囲を気にするようにきょろきょろと頭を動かし、自分の楽器を気にし、ヴァイオリンを奏でる詩人に目で何かを訴え始めた。

他の詩人も、観客でさえ気付き始めた。楽器から奏でられる音が、徐々に勝手に強みを増していく。やがて耳を押されたり、演奏を止めさせるように怒鳴り声を上げる者が現れ、多くが音から逃れるようになってしまった。

詩人たちは必死にチューニングして音を元に戻そうと試みるが、まるで効果はなかつた。

次の瞬間、楽器が激しい音を立てたかと思うと、次々に爆発するように砕け散り、その破壊音は衝撃波となってゼンマイ仕掛けの壁や椅子、テーブルとありとあらゆるものを見事に吹き飛ばしていった。

あつという間に、未来を夢見る建物は見る影もなくぼろぼろになり、幸い死者は出なかつたものの大勢のけが人が出てしまうこととなつた。吟遊詩人は全員器物破損、業務上過失傷害の疑いで逮捕されたが、連行中にリードが突然意識を失つて倒れ、一人病院へと運ばれていつた……。

それとほぼ同じ時間、隣町メトラでも一つの事件が起つていた。

コントラスとメトラを分断するように流れる一本の長い小川。上流ではコントラスによる建設工事が行われている。トーンはその日もいつものように川縁に座つて音楽の練習に励んでいた。

「少しは上手に弾けるようになったかな?」

腰までもある長く赤い髪を風にたなびかせたビオラが、トーンの隣に座つて表面に花の精巧な模様が刻まれたオカリナをポケットか

ら取り出した。

「遅かつたじやないか」

ビオラがむすっとした表情を浮かべる。

「私が朝弱いこと知つてゐくせに」

トーンがビオラと出会つたのは、ダイヤグラム大陸への機械の導入を反対し続けた音楽派の人々がこのメトラに追いやられた後、トーンが一人、この小川で草笛を吹いていたときのことだった。

「きれいな音ね」

トーンはぎょっとしてとつさに草笛を手の中に隠し、声の方へ振り向いた。

「別に隠さなくてもいいじゃない。ねえ、もう一度聞かせてよ」

すらつとしたきれいな女性が、トーンの目の前で太陽の光を浴びて真つ赤に輝いた髪をなびかせながら立っていた。同じ年とは思えないほど美しく、トーンは手が緊張して上手く音を出すことができなくなつた。女性はくすくすと笑い、同じような草を探して摘み取り、隣に座つてトーンの仕草を真似るように吹き始めた。なかなか上手く音がでない。仕返しするようにトーンも笑い声を上げると、緊張がほぐれたのか次はいつものように草笛を鳴らすことができた。示し合わせたかのように女性も草笛が吹けるようになり、二人で一緒に曲を奏でた。女性は途中で奏でのを止め、美しい音色を響かせるトーンの姿をずっと眺めていた。

視線に気付いたトーンが思わず頬を赤らめるのを見て、女性はまたぐすぐすと笑つた。

「お礼に、私も一つ弾いてあげる」

そういうて、背負つていたカバンからオカリナを一つ取り出し、演奏を始めた。ゆつたりとした包み込むような音楽は、トーンの心に触れ、搖り動かしていくように感じられた。元々自然が奏でる音に興味を持っていたトーンは、すぐにオカリナの音に心をつかまれていった。

女性は演奏を終えると、代わりのがあるからといってトーンにオ

カリナを渡した。自分はオカリナが好きだから、オカリナを使って、さつきのような美しい音楽を奏でてほしいと……。

「私、ビオラ。ビオラ・メロディオン。オカリナ、大事にしてよね」
それから二人は毎日のようにこの小川へとやつてきては、一緒にオカリナを吹くようになった。初めは上手く吹くことができなかつたトーンも、ビオラの指導のおかげで徐々に上達していき、いつのまにかアンサンブルを奏でられるまでに成長していた。

太陽が傾き始める頃にはいつも決まって、二つの優しい音楽といくつもの暖かい自然の奏でる音楽が、メトラを包み込んでいた。

しかし穏やかな時間は長くは続かなかつた。ある日、上流で行われていた工事の騒音が二人のいるところまで聞こえてくるようになり、二人は更に下流へと追いやられてしまつ。

歩きながら、ビオラが時折音のする方を気にしながら口を開いた。「工事しているっていうのは知つてたけど、まさかここまで音が聞こえてくるなんて……」

「機械派の人間は、過去のことなんて忘れてしまつたんだ」

トーンは吐き捨てるようにいつた。

「機械なんて、何が起こるか分からないうつのに」

大昔のダイヤグラム大陸は、高度な機械文明が発達した機械大国だつたという。飛空艇と呼ばれる乗り物が空を自由に飛び回り、機械で作られた人間によつて人々は自分が働くことなく生計を立て、毎日を過ごしていた。ある日自分たちの優れた技術が奪われることを恐れた大陸の人々は、他の全ての国との交易を遮断したが、その頃から、大陸のあちこちで原因不明の災厄が起こるようになつた。住んでいた人々は一人残らず死に絶え、建物や植物、大陸上に存在する全てのものが腐つていつた。大陸の異変に他の国が気付き調査船を送つたが、そのどれもが戻つてくることはなく、やがてダイヤグラム大陸は呪われた死の大陸と呼ばれるようになり、誰も近寄らなくなつた。

そんな大陸を人が住めるまでに復活させたのが、一人の吟遊詩人だといわれている。吟遊詩人は一人でこの大陸に訪れ、たった一日で呪われた死の大陸を緑の生い茂る命の吹き込まれた大陸へと変えてしまつたそうだ。

所詮は幼い頃に歴史の授業で習つた話に過ぎない。だがトーンは、それを全て信じていた。この大陸に再び機械が蔓延するようになつた原因である大昔の技術の産物が、トーンがまだ小さかつた頃に次々に発見されたのだから。

初めはもちろん、多くの人が機械の使用に反対していた。過去と同じ災厄を引き起こす氣かと、たくさんの機械が使われないまま処分された。しかし人の目を盗んで機械を使用するものが現れ、やがてその利便性が人々の欲望に満たされた心をわしづかみ、あつとう間に機械は生活の一部となつていった。頑なに機械を反対し、廃棄を訴え続けた人々は音楽派と呼ばれ、人間の大的なる可能性を阻む敵として拒絶され、忌み嫌われる対象となつた。

トーンにとつて機械は、災厄を引き起こす悪魔であり、自分たちから自由を奪つた許し難い敵であり、演奏の邪魔をする疫病神でしかなかつた。

しかしその時はまだ、本当の人の命までをも奪うことができるなどとは、思つてもいなかつたのだが……。

「ここまで来れば大丈夫だろ？」

だいぶ川を下つたおかげで、もう騒音は聞こえなくなつていた。再び川のせせらぎが聞こえ、トーンがほつとため息をつく。視線の先にちょうど良い大きさの岩が一つあるのを見つけて、ビオラにあそこに座るよう促した。

「うん……今、行くから……」

この時、何故ビオラを連れて町に戻ろうとしなかつたのだろうか。「さあ、座つて。自然の音を聞いていればきっとすぐに気分も良くなるよ」

「一体何の根拠があつて、そんなことを口にしたのだらうか。

もう一つの岩に腰掛け、目をつむつて川のせせらぎに耳を傾けた時だつた。川に何かが落ちる音が聞こえてはつと目を開けた時、トーンの頭の中は一気に真っ白になつた。

川にビオラが横たわつていた。頭を抱えるようにしてうずくまり、けいれんを起こしていた。トーンは急いでビオラを抱き自宅へと戻つたが一向に回復する気配がなく、呼んできた医者も、原因がわからないとお手上げの様子だつた。

ビオラはひどい熱と激しい嘔吐に見舞われ、数時間もしないうちに美しく端正だった顔はすっかりやつれ、苦しそうにひきつる表情を見てトーンはいてもたつてもいられなくなり、自分でも気が付かないうちにオカリナを吹いていた。

ビオラの表情が落ち着いたように見え、体にも生気が戻つてきたように思え、トーンは必死になつてオカリナを吹いた。決して慌てずに教えられたとおり、ゆっくりと、穏やかで柔らかい音楽を奏で続けた。

震える手で、ビオラはトーンを手招きした。何かを伝えようとしているのが見えて、トーンが演奏を止めて耳を近づける。しかしビオラは何をいうでもなく、両手で抱えるようにして持つていしたものを持トーンの手のひらの上に置いた。

それは、ビオラの持つていたもう一つのオカリナだつた。
「やめろよ。これはビオラのものだろ。君が持つていないと、また一緒に演奏できないじゃないか」

いいながら、トーンは必死に溢れ出ようとする涙と、震えようとする声を押さえ込んだ。「まだ、教わることはたくさんあるんだから……」

ビオラは細くなつた手を伸ばしてトーンの頬に流れた涙を拭い、優しく微笑みかけた。

「上手に弾けるようになった」と褒美。「このオカリナを使って、みんなを幸せにしてあげてね……」

そういう残し、ビオラはゆっくりと目を閉じた。
その目はもう一度と、開くことはなかつた。

これを最後に、トーンは音楽を奏でることをやめた。

コントラストとメトラで起きた一つの事件に少なからず機械が関連していることから、音楽派は機を逃すまいと機械連盟に機械の停止を申し立てるが、証拠がないため全く相手にされず、むしろ事件は吟遊詩人たちが意図的に引き起こしたのではないかとして、抗議した何人かの吟遊詩人は逮捕されてしまった。

それからというもの、音楽派はメトラでこつそりと暮らすようになった。ほとんどが音楽を恐れるようになり、歌うことを止めた。徐々に他の町へ離れていく者も増え、メトラはやがて少数の人間が暮らす、閑散とした、音楽のない町と化してしまった。

第一章・動き出した音楽

トーンはビオラが死んで以来まるで魂が抜けたように、小川にあつたあの岩の片方に座り、何をするでもなく川の流れをただずっと眺めていた。ビオラとの思い出が詰まつたことは全てを奪つた最悪な場所でもあつたが、どうしても離れることができなかつた。ビオラがまだここにいるような、そんな気がしてならなかつた。しかし、木が風にゆれる音も、虫の鳴く音も、川の流れる音も、トーンにとってはもう雑音でしかなく、耳に栓をつめて外界からの音を遮断していた。

だから、一体のオーテマシンが今までにこちらに向かつて歩いてきていることなど、知るよしもなかつたのだ。

突然右肩に激しい衝撃を受け、トーンは現実に引き戻された。何故だか全身が重だるく、ぼてつたように熱い。右肩に鋭い痛みを感じ、肩に刺さつている鋭い金属のようなものを見て、その先にあるオーテマシンを見た。笑つているかのように、顔をかたかたと上下に揺らしてこちらをみている。

「何でこんなところに……」

トーンは慌てて刺さつたオーテマシンの腕を引き抜こうとしたが、腕の先がいつのまにか十字に分かれ、がき爪のようにトーンの肩をしつかりと捕まえていた。引き抜こうとするほど肩に食い込んでいく。

トーンははつとして動きを止めた。オーテマシンのもつて左方の腕が動き出し、トーンの額にその指先が向けられたのだ。金属が削れ合つのような嫌な音を立てて勢いよく回り始めたかと思つと、腕がトーンの肩を貫いているものと同じ、鋭い槍のような姿に変わる。トーンは突然頭が痛くなり始めた。別に殴られたわけでもないのに、痛みはどんどん増していく。気持ちが悪い……。

オーテマシンの腕がゆつくりと引かれ、トーンの額めがけて押し

出される　　と次の瞬間、オートマシンと同じような槍を腕に取り付けた男がオートマシンに突撃し、トーンの肩に突き刺さっていた腕を根本から粉々に吹き飛ばした。さらにその後ろから数人の守備兵が現れ、持っていた銃でオートマシンの動きを止める。その隙に、トーンは先ほどの男と一人の女に抱えられて、少し離れた岩場の影に下ろされた。

「大丈夫か？」

トーンは隣で女が片膝をつき、どくどくと血が溢れ出す肩の傷に薬のようなものを塗り始めたのを見て、目を大きく見開いた。溢れ出していた血が、あつという間に止まってしまったではないか！

驚いているトーンを尻目に、女は黙々と包帯を巻き始めた。男の姿はなかつた。恐らく仲間の元へ戻つたのだろう。

「痛いだろうが、直に治る。安心しろ」

血を止めた薬のことも気になつたが、何よりもいきなりやつてきたオートマシンのことが気になつていて。

過去の產物が唯一同じ姿となつて復活したもの。それがオートマシン　町の安全を守る機械で作られた人間だつた。メトラを除くほとんどの町は、このオートマシンによつて守られているはずだった。人を襲うなどもつてのほかだ。

「よし、これで大丈夫だ」

血は止まつたものの、激しい痛みが消えることはなかつた。包帯を巻き終えた女の胸ぐらをつかみ、トーンは思い切り睨み付けながら口を開いた。

「何が大丈夫なんだ、一体何が！　メトラに機械が入り込んでいる時点で、十分な規則違反だ。吟遊詩人を馬鹿にするのもいい加減にしろ！」

トーンを見る女の目は、どこか悲しげに見えた。

「私にも状況が飲み込めていらないんだ。コントラスのオートマシンが、突然暴走を起こして……」

「暴走？　笑わせるな！　使いこなせないなら始めから　ぐつ」

肩の痛みにトーンがうめき声を上げる。遠くで先ほどの守備兵のものと思われる悲鳴が聞こえ、女がはっと立ち上がった。

「話しなら後でいくらでも聞いてやる」

女はそういうと、身を翻して悲鳴のした方へと駆けていった。トーンもその後を追う。

始めて目に入ったのが、地面に血を流して横たわっている三つの守備兵の姿だった。ぴくりとも動かず、開いたままの目にはすでに光が失われているように見えた。先ほどの金属の槍を腕に取り付けた男だけが、何とかオートマシンの動きを止めようと攻撃を繰り出している。しかし防戦一方といったところか。オートマシンの繰り出す多種多様な動きを防ぐだけで息が上がり、なかなか攻撃を仕掛けられないでいた。女が遠くから銃で支援するが、たいした効果になつていよいよ見えた。

トーンは自分がぐくりと膝をついていたことに気付いた。足に力が入らない。頭痛がまたひどくなり、今度は耳鳴りまで聞こえてきた。血が足りないのか視界がぐるぐると回り始める。傷の痛みからくるものではなく、もっと内部、体の組織自体が破壊されていくみたいだ……

その場から逃げだそうとしたとき、ふと心地よい風が頬をなでたかと思うと、風に乗つてやってきたのかどこから音楽が聞こえてきた。トーンは足を止めて、その柔らかく軽やかな音楽に耳を傾けた。徐々に頭の痛みが和らぎ、耳鳴りが薄れていく。

氣付くとオートマシンの動きが若干鈍くなつているように見えた。戦っていた二人もそれに気付いたらしく、これを機に一気にたたみかける。女が銃でオートマシンの関節の動きを止め、バランスを崩したところに急激に回転する金属の腕が、頭部めがけて振り下ろされた。

大きな破壊音と共に、オートマシンはその機能を失った。

「まだ息のある兵は、すぐにこここの病院に連れて行け。彼には私が

ら話すわ。大丈夫。たぶん、原因は彼じゃないから」

女は金属の腕を持つた男にそう告げ、オートマシンの回収にやつてきた兵に一言一言伝え終えると、トーンの元へやつてきた。戦いが終わつてからずつと、トーンは岩場に座り込んでいた。突然聞こえてきた音楽のおかげで随分と気分はよくなつていたが、まだ頭がくらくらしていた。まるで脳みそを虫がはいざり回つているような、いい知れない感覚に襲われる。肩も、少し動かすだけで激痛が走る。この痛みさえなればもつとましだつたかも知れないと思うと、余計に腹が立つた。

「なんだ、まだ痛むのか？ 随分顔色が悪いじゃないか」

「ああ、痛むよ。あんたのつけた薬が悪かつたんじゃないのか？」

女の軽い言葉にむづときたトーンは、はねつけるようにいつた。

「そもそもあんたらのペットにかみつかれなきや、こんな思いもせずに済んだんだ」

「……ああ。全く、そのとおりだな」

突然声の調子が低くなり、女は回収されていくオートマシンの残骸をじっと眺めていた。その横顔が、トーンには何故か非常に悲しそうに見えた。

「何かあったのか？」

「いや、君の言葉を思い出していくな」

「言葉？」何かいつただろうか。

「使いこなせないなら始めから使わなければいい。確かに、君の言うとおりだったのかも知れない」

面と向かつてそういうわれると、逆に返す言葉が見つからなかつた。まさか肯定されるとは思つてもいなかつた。だが今更肯定されたところで、何かが変わるわけでもない。

「今さら何を思うつていうんだ。まあ、助けてくれたことには礼をいづよ。僕はトーン。トーン・アンドリューだ。いつておくけど、うちの病院は本格的な設備なんか整つちゃいない。けが人を助けたいなら、どこか向こうの町に送つてあげた方がいい」

女は立ち上がり、守備兵の規則に則るようにして敬意を払つよつに一礼をした。

「私はミンス・コンサーティーナ。コントラスで守備第一隊隊長をやつていた。本当に申し訳ないことをしたと思つて、話し終えると同時に町の方から兵士が走つてきて、先ほどトーンがいつたことと同じ事をミンスに告げた。ミンスは最後にもう一度トーンに向かつて一礼すると、兵士に矢継ぎ早に指示を与えたながら町へと向かつていった。それを見送ることなく、トーンは一人自宅へと戻つていった。

「ただいま」

家中に入ると、奥から何やら良い匂いが漂つてきてトーンは思わず鼻をひくつかせた。今日の夕食はきっと自分の大好物に違いない。そう思うと何だか急にお腹がすいてきたような気がして、足早に扉を開けた。

居間では、母フルートが丁度テーブルに料理の盛られた皿を並べているところだった。フルートはすぐにトーンに気付いたが、明るく迎えようとした笑顔は、一瞬にして不安に曇つた表情に変わつていつた。持つていたお皿が手からすべり落ち、盛られていた料理もろとも床に散らばつてしまつ。トーンは慌てて散らばつた料理を片付け始めた。香ばしい匂いが一面に漂つっていた。

「せつかくのおいしそうな料理なのに、何やつてるんだよ」

フルートは呆れたように大きなため息をついた。

「それはこっちの台詞よ。その肩、大丈夫なの？ 何をやつてきたのか知らないけど、一体どうやつたらそんなに包帯を巻くよつなことになるのよ」

トーンは拾い集めた料理を紙で包み、まとめて「」箱に捨てた。水につけた雑巾をしぼり、床を拭き始める。

「別に、ちょっと転んだだけさ。見ての通りちゃんと動くしね。痛みはあるけど、そんな気にするほどでもない。ま、若いうちはみんな

な無茶もするものさ」

トーンが笑い声を上げる。それでもフルートは不安げに包帯の巻かれた肩から目を離そうとしなかった。

「ならいいけど、最近あんた、ずっと元気がなかつたから……」拭き終えた床に鼻を近づけてみる。匂いは自分の間は取れないかもしれない。

「母さんが心配しているようなことは、死んでもやらないって。自分の息子が信じられない？」

それ以上フルートは何もいわず、残りの料理を再びテーブルに運び始めた。

ビオラが死んでから音楽を弾かなくなり、家では元気な自分を演じる息子をフルートがずっと心配していることをトーンは知っていた。前に一度遅くまで帰らなかつたとき、自殺でもしたんじゃないかとメトラの住人総出で探索されたことがあつたほどだ。最近料理に力が入っている理由も十分理解していたが、ビオラを忘れない限り、前のような自分に戻ることはできないだろうと思つていた。

「そうそう、知つてる？」この前までコントラスの病院に入院していたリードつていう吟遊楽団の人人が、いつのまにか病院を抜け出していたっていう話。何があつたかわからないけど、あんな機械だけの場所に閉じこめられたら誰だつて逃げ出したくなるわよね。でも家にも帰つてきていないなんて、本当に何かあつたのかしら……」

あれこれと余計な詮索をするのはフルートの悪い癖だ。こういうときは決まって簡単にあいづちをする程度だったのだが、今回はそうもいかなかつた。

「あの機械塔の事件つて、衝撃波を起こしたのは吟遊楽団じゃないんだよな。塔に作つたつていう機械が誤作動を起こしたつてことも、十分あり得たんじゃないかなって思うんだよ」

オートマシンの暴走を見る限り、機械の誤作動は相当危険なものに違ひなかつた。衝撃波を作り出すことぐらい、容易なことのよう

に思えたのだ。

フルートは少しの間頭を傾けて考えていたが、やがて首を横に振りながら答えた。

「私にはわからないわ。サンザさんなら外のお友達がたくさんいるし木の声も聞こえるつていうから、そういうことに詳しそうな気はするけど……」

「フルートさん、大変だ！」

突然玄関の方で大きな声がしたかと思つて、きれいに整えられたあごひげを生やした年老いた男が部屋の中に入ってきた。フルートが笑顔でそれを迎える。

「あらサンザさん、またきれいな楽器でもできあがりました？」
サンザは荒い呼吸を整えようとせず、肩を上下に揺らしながら答えた。

「楽器のことじやねえ……いや、それよりももっと大事なことなんだ」

いつもとは違う切迫した様子に、フルートも真剣な表情へと変わる。

「今日コントラスで暮らしている奴から連絡があつたんだが、それが、コントラスが無くなつちまつたつて！　あちこちの木も騒いでいるんだ。仲間が燃えてる、たくさん死んでるつてな。聞くところによれば、何でも町中にあつたオートマシンが一斉に暴動を起こして、町を破壊しちまつたらしいんだ」

あまりに突然の報告にて、二人とも啞然とするしかなかつた。

トーンははつとミンスの最後の言葉を思い出した。コントラスの隊長をやって『いた』……それに何があつたのかと聞いたときの驚いた表情。あのときのオートマシンは、コントラスを破壊してメトラにまで流れ込んできた暴走したオートマシンだったのだ。

フルートは未だに信じられないといった表情でいった。

「一体何が起きたつていうんです」

しかしサンザの視線はトーンの右肩に移されていた。

「トーンお前、その包帯どうじまつたんだ。いや、何があつたか
つて？ 何でも研究段階で事故を起こしちまつたらしくて、その時
に発生した電磁波が何かがオートマシンをおかしくしちまつたって
話だ。そういうや、暴走する直前に音楽が聞こえてきたとかもいって
たな。信じられないなら、外に出て見てみるといい。今ならまだ、
西の空に黒い煙があがっているのが見えるだろ？」

フルートと一緒にトーンは慌てて外に飛び出した。すでに他の人々もこぞって西側の空を眺めている。紛れもなく、黒煙が上がっていた。それも一本ではなくあちこちに。しかしトーンは、まさか自分がこの事件に直接関与することにな
るとか、この時はまだ思つてもいなかつたのである。

第三章 敵対

「コントラスが壊滅したと教えられてから三日、初めは「機械の呪いだ」とか「罰が当たつたんだ」と騒いでいたメトラの人たちも、今ではすっかりいつもの生活に戻っていた。いつもとまるで変わらない景色を毎日のように見せられては無理もないかも知れない。だがトーンは違った。実際にその目で見たオートマシンの、不気味な笑顔にも見えたあの表情は、単なる暴走とくくつていいものだと到底思えなかつた。

「音楽の神様を裏切つた罰が当たつただけよ」

フルートはそういうつてトーンの話をろくすっぽ聞かずに、買い物へ出かけてしまつた。メトラには、機械にまみれた生活に異議を唱え、そのために住む場所や家族を失つた音楽派の人々が住んでいる。古くから伝わる、歴史に名を残した音楽の神の言葉を信じ、音楽をこよなく愛し、空氣を歪める機械は悪魔の化身だとして忌み嫌つてきた。機械を過剰利用することは、神の冒涜に値するとして。

実際に、機械は暴走を起こした。それも町を一つ破壊してしまうほど激しく。これまでそんな大きな事件は起つたことがなかつたが、最近になつて様々な問題が発生し、その全てに機械が関係している。思えばあの吟遊樂団を襲つた事件から全てが始まつているのではないか。ダイヤグラム大陸は灰と血で赤白く染まり、再びその命を終えてしまうのではないかと、トーンは不安でならなかつた。

外へ出て、コントラスの方角を眺めた。未だにゅうゅうとのぼる黒い煙が、事の壮大さを物語つてゐるように思える。

そのときふと、トーンの耳に聞き覚えのある音楽が聞こえてきた。守備兵が暴走したオートマシンと戦つてゐる時に流れてきたものと同じ音だ。トーンは惹かれるようにして、音のする方へと歩いてい

つた。

街から少し離れた場所にある大きな池のほとりに、麻布できた帽子を浅くかぶった男が地面に座ってホルンを吹いているのが見えた。細くしなやかな指が細長いホルンを上手に扱い、細い体にしては考えられないほど力強く、かつ纖細な音を引き出している。トーンはじつと立つたまま、奏でられる美しい演奏に身をゆだねていた。こうしているのは何日ぶりだらうか。ビオラがいなくなつて以来、トーンは意識的に音楽を避けるようになつていた。そうすれば、嫌なことを思い出さなくて済むと思っていた。しかし違つた。音楽がこれだけ心地良いと思ったのは初めてかも知れない。

トーンは無意識のうちに、ポケットにずっとしまったままにしていたオカリナに手を触れていた。あの時から何も変わらない温もりを感じて、思わず涙がこぼれた。

男が最後の音色を奏で終えると、視線を池の方に向けたまま口を開いた。

「拍手をもらつたことはあるが、涙をもらつたのは初めてだ」

「いや、すみません」

トーンが慌ててこぼれた涙を拭おうとするのを、男が言葉で制する。

「せつかく流れた涙だ。流しておけばいい。そうすれば心の内にため込んだ重いものも一緒に流れてくれる」

まるで自分の過去を知っているかのような口振りに、トーンはどきつとして男を見た。見覚えがあるように思えたが、今初めて見る顔のようにも思えた。いぶかしむトーンを尻目に、男は一人話しを続けた。

「しかし、私も久しぶりにいい演奏ができた。やはり聞いてくれている人がいるというのは良いことだな」

男は軽く顔をほこりぱせながら、うんうんと誰にでもなく頷いている。

「こつもこつもで演奏しているんですか？」

「ああそうだ。」この池の歌声は美しいぞ。つと、紹介が遅れてしまったな。私はウインド・ホルンだ。ウインドと呼んでくれて構わないよ。君は……」

振り向いたときにトーンの右肩に巻かれた包帯に氣付き、一瞬男は顔をしかめたかに見えたが、すぐに元の表情に戻つて言葉を継いだ。

「珍しいな、そんな大層に包帯を巻いて。何か大きな怪我でも？」

「え、ええ……まあ」

なんと答えていいかわからず、トーンは言葉をじごしたが、その答えを相手の方からいわれるとは思つてもいなかつた。

「オーテマシンにやられたのか？」

トーンはぎょっとしてウインドを見た。ウインドは暗い表情で言った。

「気付くのが遅すぎたか……すまないことをした」

トーンは呆然とその場に立ち尽くしていた。何をいつているのか、何故謝られているのか見当もつかない。トーンの様子に気付いたウインドがにこやかな表情を浮かべた。

「お詫びといつてはなんだが、面白いものを見せてあげよ。まだ、涙のお礼もしていいことだしな」

そういうて、座つたままあごを白い手でさすり始める。

「ふむ……そうだな。あそこに背の高い木が一本生えているのが見えるな？ よし。今からあの木の間を、二羽の鳥がこちらに向かつて飛んでくる。あの木の間だ」

ウインドが指さす方にトーンは視線を移した。すると次の瞬間、宣言通りに二羽の鳥が一本の木の間を通つて飛んできて、一人の頭上を超えていった。白い羽が一枚、ひらひらと落ちてくる。トーンは手のひらでそれを受け止めた。

「すごい……いたとおりだ！」

「その羽は予想していなかつたがね。きっと、音楽の神から音楽を愛する君への贈り物だろう」ウインドは笑顔で答えた。

「一体、どうやつたんですか？」

「別に何も。ただ、音を聞いただけさ。風の音をね」

トーンは首を傾げた。風の音といえば、夜中に扉を叩いたり、家を揺らす時に鳴る音くらいしか聞いたことがない。

「この世界には、至るところに音が存在する。波の押し寄せる音や、草木が揺れる音、木の葉が擦れる音など、想像もつかない数の音がな。音はそれそれで意味を持ち、自分を歌うものもあれば、周囲の様子を歌うものもある。私は、風が運んでくる様々な音を聞き分け、遠くの様子を知ることができるのだ。あの日、汚れて歪んだ音が聞こえてすぐに機械がメトラに迷い込んだとわかつたが、まさかすぐ近くに人がいるとは思いもしなかったんだ」

トーンはふと、ビオラのことを思い出した。昔、一緒に音楽の勉強をしていた時に、彼女も同じようなことをいつていた。大小さまざまな石を集めて簡単な音楽を演奏してみたり、落ちていた太めの枝を拾つて、即席の笛を作ったこともあつた。「音楽は、人が作り出したものじゃない」という言葉は、今でも心に残っている。楽器も、自然が作り出した音楽を美しく思つた人間が自分でそれを再現しようと思つて作り上げたものらしい。

ウインドが立つてじつとしているのを見て自分も聞いてみようと風の音に耳を傾けてみたが、ウインドの険しい表情から、もう遊びは終わつていてることに気付いた。

「戻つた方がよさそうだ。機械が、この町に近づいている」

町の広間に戻ると、町の人々全員が広間に集まつていた。奥にはどこかの町の守備兵が何やら大きな機械をいじりながら話をしている。その中にはミンスの姿もあつた。守備兵に向けて飛ばされたたくさんの野次の中、トーンはウインドと別れ、母の姿を見つけて人混みをかき分けながら近づいていった。

「何があつたの？」

「あんた、今までどこ行つてたのよ」フルートが呆れた顔でトーン

を迎えた。「私もよくわからないのよ。気付いた時にはもうあの人たちが得体の知れない機械を持って町に入ってきたらしいわ。男の人たちが止めようとしたらしんだけど、ほらあそ！」

フルートが示した方向に視線を移すと、人混みから離れた隅でちこちに傷を負つて痛みにうめく数人の男を見つけた。フルートがため息をつくようにいった。

「ひどいことするわよね。何で私たちがこんな思いをしなくちゃいけないのかしら……」

「おおトーン、一体どこに行つてやがったんだ！」

大きな声にトーンは辺りを見回してみたが、あまりの人混みで声の主を見つけることができずきょろきょろしていると、再び背後で声が聞こえてきた。

「こつちだこつち！」

今度は発見することができた。少し遠くにこちらに手を振る毛のないサンザの頭が見えたかと思うと、恰幅の良さからは考えられないほどするすると人の間をすり抜けて一人の元へと近づいてきた。

「全く、母さんに余計な心配かけさせるんじゃねえ」

もうどこにもいかせないぞといわんばかりに、サンザがトーンの頭を両腕で覆つてぎゅっと抱きしめる。汗くさいにおいが鼻についた。

フルートはふふっと微笑みながらいった。

「いいのよ、サンザさん。こうやって無事に帰つてきたわけだし。一緒に探してくれてありがとうございました」

サンザが照れて力が弱まつた隙をついて腕から逃げ出した後、トーンはその向こうに見える巨大な白くくすんだ鏡のようなものに視線を向けた。

「諸君！」

突然鳴り響いた巨大な音に、村の住民全員が両手で耳をふさいだ。同時に、これまでの騒ぎが嘘のように静かになった。広間の正面に設置された鉄製の壇の上に、しわ一つない新品同様のステッツに身

を包んだ男が巨大な鏡を背にして立ち、眼鏡越しに周囲を見渡している。

「突然の訪問で大変申し訳ないが、一つ確認しておきたいことがある、お邪魔した」

男の声は口元からではなく、左右に配置された大きめの黒い箱から聞こえてくるようだつた。時折耳をつんざくような高い音が漏れ、なんだか気持ちが悪くなつてくる。そんなことなど全く気にしていない様子で、男は大きな声で続けた。

「君たちも、コントラスで起きた悲しむべき大災害はもう知つていいはずだ」

「何が大災害だ！」

「機械の暴走は、お前達が招いた人災じゃないか！」

巨大な音に耳が慣れてきた何人かの男たちが声を荒げて壇上の男に野次を飛ばす。それに呼応するように次々と声が上がり、あつという間に周りはやかましさを取り戻した。と、今度は大きな爆発音が鳴り響いた。壇の前にいた守備兵が、構えていた銃を空に向けて発砲したのだ。それが何を意味するか、その場にいた全員がすぐに理解し、口をつぐんだ。壇上の男は満足げな表情を浮かべて再び口を開いた。

「さて、諸君！ この大災害は、何故起きたのか。起こるべくして起きた？ いや、違う。これは、起こすべくして起こされたのだ」

壇上の男がこれ見よがしに周囲を見渡す。人々は不安そうにそれを眺めていた。

「これを見てほしい」

背後の鏡が小刻みに振動するような音を発したかと思うと、突然ぱつと一枚の写真が浮かび上がつた。近くで話し声が聞こえてくる。写真には交差点を行き交う人混みがぼやけて見える中、中央に立つトーンと同じ年ぐらいの若い男だけが鮮明に映つていた。茶色のジヤケットを羽織り、背には楽器を入れる専用のショルダーが背負われている。写真が消えて元のくすんだ鏡に変わったかと思うと、今

度は別の写真が浮かび上がった。建物や地面などありとあらゆるものが粉々に破壊され、その残骸のようなものが至るところに散らばっている。一枚目の写真で若い男が立っていた場所と同じところに、同じ種類のショルダーがぼろぼろになって落ちているのが見えた。再度写真が切り替わり、先ほどの一つの写真が左右半分ずつに映し出された。

「この一枚は、同じ場所で撮影されたものだ」

「よめきが走った。誰だつて、この一枚の写真を見て同じ場所だと気付く人はいないだろう。それほど、違いすぎた。」

「惨状をどうこういいたいわけではない。問題はこの男だ」

壇上の男が左手を写真に向けると、左側の写真にあるショルダーを背負つた男の上に赤い丸が映し出された。

「この男が背負つているのは君たちもよく存じのはず。バッグパイプという楽器を入れる専用のショルダーだ。そして……」

赤い丸が、右側の写真にあるぼろぼろのショルダーに移される。

「まるで同じ物が、ここにぼろぼろになつて落ちている。さて、それは何故か」

写真が消えるのと同時に赤い丸も消え、壇上の男は再び正面を向いていった。

「さらに我々の調査で、コントラスが消える直前に忌々しい音楽が鳴り響き、同時に人間の体に害を及ぼすほどの超低周波が検知されているのがわかつた。これは、特定の楽器でも使用しない限り発生させることは限りなく不可能に近いとされている」

最後までいわずとも、男が何をいいたいのか、先ほどから感じられる冷たい視線の正体がなんなのか、その場にいた誰もが気付き始めた。

「先ほどの一つの画像、事件直前に鳴り響いた音楽、異常なまでの超低周波の発生。それが招いた、コントラスの壊滅」

「俺たちは何もやってない！」

住民の一人が突然叫び声を上げたが、守備兵が銃口を向けたのに

「気付き、慌てて口をつぐんだ。

「別に君たちを疑っているわけではない。先にも言ったが、問題なのは先ほどの若い男だ。名は、リード・メロディオン」

その言葉に、先ほど小声で話し合っていた二人の男がびっくりと体を震わすのを、壇上の男は見逃さなかつた。守備兵に一人を連れてくるよう指示し、何か知つてゐるかと問う。一人は昔、コントラスで起きた衝撃波の事件に居合わせ、パーティに招待され音楽を演奏した吟遊樂団の団員だつた。リードは吟遊樂団の一人で、倒れて病院に運ばれた後、消息を絶つたという。

「他に、何か事情を知つてゐる者はいるか？」

住民の半分ほどが手を挙げた。それぞれリードの過去、学歴、音楽に対しての才能、性格や癖など必要ななさそうな情報ばかりであつたが、自分が助かりたい一心か、僕が私がと壇上へ押し寄せた。壇上の男が後ろを向いていつた言葉は、そんな彼らの期待を裏切るものだつた。

「ミンス、こいつらを牢にぶちこんでおけ」

周囲が一瞬にして静まりかえつた。男の表情は、まるで仮面を脱ぎ捨てたピエロのように冷たかつた。

「事件に荷担している可能性のある者は、例え子供であれ危険因子と見なす！ 今手を挙げた者全員、ほとぼりが冷めるまで牢獄暮らしだ！ 抵抗する者や異を唱える者は、即刻死でもつて償つてもらう。いいな！」

命をなげうつてまで抵抗しようとする者は誰一人存在せず、始めの勢いは全くどこかへ消え失せていた。守備兵によつて一人一人鎖状の手錠で繋げられ、牢獄行きの列車となつてゆっくりと歩き始めた。トーンは先頭を歩くミンスの姿を黙つて見続けていた。彼女は今、何を思つてゐるのだろうか。本当にこれが正しいとでも思つてゐるのか？

トーンはフルートを見た。顔は疾病患者のように青ざめ、目には涙が浮かんでいる。両手を組んで、音楽の神様に祈りの言葉を捧げ

ていた。

「気に入らねえな」

異様な静けさの中で、低く太いサンザの声はいつもの何倍にも大きく聞こえたように思えた。壇上の男がいかにもいらついた語調でいった。

「今、何といったのかな」

サンザの手は震えていた。それが怒りからなのか、怖さからなのかはトーンにはわからなかつた。

「気に入らねえっていつたんだ。てめえらがやつてるのは、単なる責任のなすりつけに過ぎねえ。音楽が悪いだと？ ふざけるな！ 機械をおかしくしたのも、音楽をおかしくしたのも、人の心をおかしくしたのも全部お前たちじゃねえか！」

一発の銃声が鳴つた。

壇上の男が構えている銃の先から煙が上がっているのが見えた。

トーンの隣でサンザがぐくりと膝をつく。

「減らず口を叩くなど、いわなかつたかな」

サンザの体が、ゆっくりと前のめりに傾いていき、どすんと音を立てて地面に倒れていった。フルートの奇声にも似た悲鳴が聞こえる。

あまりに突然の出来事に、トーンは体が全く反応しなかつた。サンザが、幼い頃から父親代わりに相手をしてくれた優しいサンザが、今日の前で胸から血を流して倒れていた。誰かが近寄つて口元に顔を近づけ、まだ息があると声を上げた。他の誰かと力を合わせてサンザを抱き上げ、担架に乗せて病院へと運んでいった。その後ろをフルートが追つていく。

姿が見えなくなつても、サンザはぴくとも動くことはなかつた。トーンにはその姿がまるで、この町の未来を物語つているかのように感じていた。

このまま、この町は無実の罪を着せられて滅んでいくのだろうか？ しかし次の瞬間、突然耳が貫かれるような、痛みを伴う超音波の

ような音が聞こえてきた。頭が割れそうになるほど痛い。まるで脳みそを直接槍で突かれていると思うほどだ。守備兵も誰もが身動き一つ取れず、全員が耳を押さえて超音波から逃れようとしている。少しもしないうちに、痛みに耐えかねた人々から、悲鳴にも似た甲高い奇声が漏れ始めた。

とその時、再び聞き覚えのある音楽が周囲を包み、徐々に痛みが緩和されていく。見ると、痛みに顔を歪めながらも必死にホルンを吹くウインドの姿があった

「誰でもいい、音の発生源を探すんだ！」

ウインドはホルンを片手に、大声で周囲の人々に呼びかけた。トーンは母にその場でじつとしているようにいうと、早速音の聞こえる方へ駆けだした。超音波は普通の音に比べて物質を跳ね返りやすいという性能に、ほとんどの人が悪戦苦闘を強いられていたが、他の人に比べて耳からの情報を真っ直ぐにとらえることができるトーンは、聞こえてくる音の強さや性質からこれまでの道筋を頭の中で辿り、やがて草むらの影に小刻みに震えた大きめの貝が落ちているのを発見した。トーンは側に落ちていた石を拾い上げると、大きく振りかぶり、貝めがけて思い切り叩きつけた。貝は音を立てて碎け散り、まだ小さく震えていた破片も、やがてその役割を終えた。超音波は消え、その場に一時の安息が流れた……。

「まさか、また君に世話になるとはな」

貝の残骸を調べながら、ミンスが口を開いた。数人の守備兵が右往左往している。

「肩の傷はどうだ。もう痛みはないか？」

トーンは何も答えなかつた。何をどう答えればいいかわからなかつた。自分の町に機械を持って入り込み、無実の人間を 町の仲間を連れ去るうとした。今回の事件だって、ミンス達が引き起したんじゃないのかと思いこんでいた。こいつらさえ来なければ、この町はずつと平和だつたんだと……。

「なんといえばいいか……」

ミンスが言葉を漏らしたとき、遠くから兵士がこちらに向かつてくるのが見えた。その後ろには、ウインドの姿があった。

「失礼します！」指示通り、音楽を演奏した人物を連れて参りました

した

「ご苦労だった」

守備兵はミンスに一礼すると、踵を返して自分の持ち場へと戻つていった。ミンスがウインドに向かつて軽く一礼する。

「ミンス・コンサーティーナだ。パンの守備兵の第一隊長として指揮を執つている」

ミンスが握手を求めたが、ウインドはそれに答えず、じつとミンスの目を見つめていた。ミンスは決まりが悪そうに出した手を戻し、話しを続けた。

「急に呼び出して申し訳ないが、確認させてほしいことがあった。今回の事件、君が音楽を演奏すると同時に、貫くような痛みが和らいだように感じた。何か知つているのではないかと思つてな。今回の事件について」

「神の教えを破り、災害を招いたお前達のどに、教える義理がある？」

「いわなければ、君も目を見つけたこの青年も、牢獄にぶちこまなくてはいけなくなる」

トーンは大きく目を見開いた。まさか、まだ疑つてはいるというのか！

「自分たちの非は、あくまでも信じないということか
ウインドが大きくため息をついた。

「お前達の想像通り、事件の原因は音にある。しかしその根源は、お前達が過度に使い続けた機械がはき出す超低周波が、空気の調律を乱したからだ。空気の調律が乱れたことで、本来美しいはずの音色は歪められて、今回のような超音波となつてあらゆるものに悪影響を及ぼすようになった。その良い例が機械塔で起こつた衝撃波だ。

お前達の愛する機械が反抗期になつたのもな

「ウインドの皮肉が込められたいい回しを気にする」ともなく、ミンスは一言一句漏らすまいと書類にペンを走らせた。何枚か紙をめくり、貝の絵が描かれている紙を取り出して「一人に見せる。

「ではトーンが粉々にしたこの貝も、音が歪められたというのか？しかし、それではおかしいぞ。ここには機械はほとんどなかつたじゃないか」

「空気は風に流れるだろ？ 歪んだ調律は時間をかけてこのメトラをも浸食していった。お前達が運び込んだ機械が、そこに追い打ちをかけたんだよ」

ウインドの責めるような口調にミンスは一瞬表情を強ばらせたが、すぐに元の表情に戻して質問を続けた。

「わかった、質問をかえよう。先に見せたリード・メロディオൺという人物は

「私がわかるのは」

ミンスの言葉をさえぎるよつこ、ウインドが口を開いた。

「機械の暴走は空気の調律が乱れたことが原因であるといふ」と。音はその被害を受けて様々なものに影響を及べるよつになつたということ。その二つだけだ

ミンスが全ての書類を書き留めて、再びウインドに向き直った。「そういえば君の名前を聞いていなかつたな

「ウインドだ」

「ではウインド、トーンの一員には、明日から我々守備兵の一員として行動してもうひ。今日中に出発の準備を済ませておいてくれ

「そんな！」

トーンが声を上げた。さっぱり意味がわからない。一人の話の内容もいまいち現実味がなく、信憑性もなかつた。空気の調律？ 音の歪み？ おまけに機械派の一員となつて行動するだつて？ そんな馬鹿な話があつてたまるか！

しかしそんな馬鹿な話は、全て力によつてねじ伏せられるものだ

と思い知らされる。

「牢獄で余命を過ごすか、一緒に来て誇りを勝ち取るか。選択は自由だ」

フルートはなんて思うだろ？トーンはいい知らない怒りを覚えながらがくりとうなだれて、母への言い訳を考えながら歩き出した。

後ろの方で「本当にすまない」とコツコツの声が聞こえてきた。

家に明かりがついていないのを見て、トーンは少なからずほつとしていた。できるだけ歩く速度を遅くして時間をかけてあれこれと考えてはみたが、一日のうちにあまりにも多くのことが起こりすぎて、全く心の中の整理がついていなかつたのだから。

まだ病院から戻っていないのだろう。トーンも一度足を向けようとしたが、どうしても一歩が踏み出せなかつた。元気であればいいが、もし元気でなければ……意識が戻らず、いつ回復するかもわからないといわれたら、余計辛くなるだけだった。

「うわあ！」

部屋に明かりをつけた瞬間、トーンはいるはずもない人物が目に入つて思わず声を上げてしまつた。まだ病院にいるとばかり思つていたフルートが目を赤く腫らし、青ざめた顔で床に座り込んでいた。「おかりなさい」

トーンは胸が高鳴るのを感じた。地獄でも見てきたかのようなフルートのうつろな声は、記憶する限り父が死んだとき以来だつた。

「サンザの調子、どうだつた？」

できるだけ平常心を装つてはみたが、震える声だけはどうにもならなかつた。

「意識が戻らないって……あれからずつと。お医者さんがこの設備じゃ無理だつて、他の町に運ばれていつたわ」

明らかに納得していないうな語調だつたが、トーンはほっとしていた。生きているとわかつただけで心の重みが軽くなつたような

気分だつた。

「そこでなら、助かる可能性があるんだる？」

フルートが吐き捨てるようにこいつた。

「機械の町よ？ そんなところに希望もなにもあるわけないじゃない……」

赤く腫れ上がった目に再び涙が溜まり始める。顔には悲哀の色が浮かび上がっていた。

「私、何か悪いことしたのかな。音楽の神様に背くようなこと、した？」

フルートの問いかけに、それが求める答えではないとわかつていながらもトーンはただ首を横に振つただけだった。

「ならどうして、いつもいつも機械が私を苦しめるの。どうしてサンザさんがあんな目にあわなくちゃいけないの。お父さんだって……」

トーンは当時まだ小さくてあまり覚えていなかつたが、昔まだ機械派よりも音楽派の割合が多くつた頃、機械派の人間が機械の良さを伝えるため、大陸中に機械を持つて回つていたことがあつた。父は今では無くなつてしまつた反機械連盟という組織に所属し、仲間と共に運動を止めようと各地にやつてくる機械派の人間を追い返してゐた。しかしある時、宣伝中の機械が突然爆発を起こし、多くの死傷者が出でしまうという大惨事が起きた。爆発した機械の傍に立つていた父の亡骸は、もう見る影もなかつたという。

「悪いのは向こうなのに、どうしていつも苦しむのは私たちなの！ どうして……」

声を押し殺してむせび泣くフルートの姿を、トーンは真つ直ぐ見つめることができなかつた。こんな状態で話をして、余計にフルートを苦しめることになるのは考へるまでもなかつた。

何もいわずに姿を消すのが一番なのだろうか。心配をかけることはなるが、断ることができない以上、他に方法は思いつかなかつた。

「ちょっとでかけてくるよ」

後ろめたさを抱えつつ、トーンは逃げるよつに部屋を出て行った。

「じこで時間をつぶそうかとメトラを一通り歩いてみた結果、トーンは人里のつかないあの池のほとりにやつてきていた。これでいいはずだった。他に方法はなかつた。それでも、心に残る寂しさがなくなる」とはなかつた。

「おや、君も来ていたのか」

ぎょっとして振り返り、声の主を見てトーンはまつと胸をなで下ろした。

「それとも、じこに身を隠そとでも思つていたのかな？」

ウインドは見つけてしまつてすまないとでもいいたげに軽く笑うと、トーンの隣に腰を下ろした。一人とも言葉を交わさず、池の水面を眺めがら、聞こえてくる様々な音に耳を傾けていた。ここにいると全てを忘れていいように思えてくるくらい、心地がいい。でも、隣で安らぐような顔をしているウインドに、不快感も覚えていた。

「どうして、そんな顔ができるんですか」

無意識のうちに、自分が声を荒げていることに気付いた。

「わけもわからず向こうの勝手で調査隊の仲間にさせられて、いつ死ぬかもわからない場所に連れて行かれるつていうのに！」

ウインドの表情から笑みが消え、真剣な眼差しで答えた。

「どのみち、空気の調律が完全に乱れればみんな死ぬ」

一瞬、全てがどこかに消えて無くなつたかのような沈黙が辺りを包み込んだ。

「一体何をいって……」

「私たち人間は空気を吸うことによってその生を保ち、この声や、池の水が揺れる音、ホルンから吹き出される音楽も全て、空気が存在することで成り立つていて。その空気が乱れれば、それら全てが同じように乱れ、歪んでいく。始めにその影響を受けたのが音楽だった。音楽は心を癒すものから、心を壊すものへと姿を変えた。次

は私たち人間の番だ。特に私たちのように音楽に敏感な者は影響を受けやすく、体内の調律が乱れやすい。中には極度の苦痛を伴いながら死んでいく者もでてくるだろ？」「

トーンは口が渴くのを感じていた。そう、あのときはいつものようにいつもの場所で、ビオラと音楽の練習をしていた。コントラスから聞こえてくる機械の音から逃れるように、下流へと移動していった。ようやく音が聞こえなくなり、練習を始めようとした矢先、ビオラは倒れた。これまで見たこともないほど顔を歪め、苦しそうに胸を強く掴んでいた。滝のような汗が全身から流れだし、まるで燃えているように体が熱かつた。医者に診せても一向によくならず、トーンがオカリナを吹いたときに初めて、表情が落ち着いたように思えた。

それと全く同じ事が、さっきの事件でも起きていたじゃないか。でも、そんなふざけた話しがあるか？　たとえ真実だとしても信じられるわけがない。つまりビオラは、音楽を心から愛した少女は、その愛した音楽によつて殺されたというのか……。

堰を切つたように溢れ出した涙を、トーンは抑えることができなかつた。眞実がわかり、何とも皮肉な現実を突きつけられ、締め付けられるように胸が苦しくなつた。このことを知つていればもつと何かできたかも知れないと思うと、ただ辛くて悔しくて、自分が無知であることを呪つた。ただ死ぬ間際の彼女の表情が、苦痛ではなく安息の色を浮かべていたことだけが、心の救いだった。

ウインドの手が優しくトーンの肩に回される。そのままぎゅっと顔を胸に押しつけられ、暖かいウインドの胸の中で、トーンはむせび泣いた。ウインドは誰にいうでもなく、口を開いた。

「私も昔は吟遊師団の一員として、様々な場所で様々な人に、それこそ機械派、音楽派に関係なく、音楽を演奏して回つた。聞く人がみな、演奏の後には拍手を贈つてくれ、安らぎを手に入れて去つていつた。しかし私は、やがて時が経つにつれて音楽がおかしくなっていることに気付いた。それが、機械のせいであることも」

落ち着きを取り戻し始めたトーンは、ウインドの話しに耳を傾けた。

「機械塔設立のパーティーに吟遊樂団が招待されたとき、私は猛反対したよ。必ず良くないことが起こるという確信があった。だが音楽を愛し、人を愛した一人の青年は、『音楽を演奏して少しでも喜んでもらえるなら』といって聞かなかつた。私たちは仕方なくパーティーに招かれ、演奏した」

そして、壊れてしまった。というウインドの声は、非常に重たく、陰鬱だつた。

「きっと彼は、ずっと前から空氣の調律の変化に気がついていたのだろう。演奏も素晴らしかつたが、とりわけ音に対しても誰よりも敏感だつた。自分の奏でる音楽で、人の心だけでなく、空氣の調律さえも癒してあげたい……そう思つていたのかも知れない」

「まさか、僕はそんな善人じやないさ」

背後から声が聞こえてきたかと思うと、突然衝撃波がウインドを襲い、トーンを通り越して木の幹に勢いよく吹き飛ばされた。トーンが振り返ると、そこにはあの巨大な鏡に映し出された人物に非常によく似た男がこちらを見ていた。

「久しぶりだね。随分ふぬけちゃつたみたいじやないか」

男は不吉な笑顔をワインドに向けた。ワインドは痛みにうめきながらも、木の幹で体を支えながらなんとか立ち上がり、男の顔を正面から見つめかえした。

「随分なご挨拶じやないか。リード、ずっと心配していたんだぞ」

トーンはぎょつとしてリードと呼ばれた男の顔を見た。この男が、リード・メロディオン　今回の事件を引き起こした、張本人……。

「何を心配する必要があるのさ。君が思つていることをしようとしているだけじやないか」

そういうつて、リードはふふつと笑つた。

「僕はこの大陸を救う。人々が汚した音楽を使って」

「お前がしていることは、ただの人殺しだ」

リードが高らかに笑い声を上げた。

「人殺し？まさか、僕は大陸を汚染するものを排除しているだけさ。君もいついていたじゃないか。機械は人を殺すつて。このまま放置すれば、僕たちだけじゃない。全ての人が死んでしまう」

「ウィンドは食いついた。

「音楽は罰するものじゃない。救うものだ。殺しの道具に使えば、それこそ機械と何もかわらない」

トーンはその言葉にはっとし、慌ててリードに傾きかけていた気持ちを振り払った。ビオラは何といつていた。音楽は人の心を癒すものであり、人の心を素晴らしいものにするといつていたはずだ。全てを壊すことだけが全てじゃない。

トーンはその気持ちを心に固めるかのように、大きな声でいった。「美しく人の心に響く音楽が、大切な人が何より大事にしていたものだつた。その音楽を汚し、別のものに変えてしまうというなら、僕が何としても止めてやる。絶対に」

一瞬、リードが寂しそうな表情をしたように見えたが、足下にあつた草をきれいにむしり取り「好きにすればいいさ」といつて草笛を吹いたときには、もうリードの姿はどこにも見えなくなつていた。リードが立つていた場所を、トーンは穴があくほど見続けていた。背丈格好をしつかりと頭にたたき込み、決して忘れないよう何度も顔を思い浮かべた。薄い夕焼けの色をした短い髪、月の光に淡く照らされた端正な顔立ち、優しそうな表情とは裏腹な、真実を決して見落とさないといったような冷たい瞳を、決して忘れることがないようになつた。

トーンはオカリナを取り出した。ビオラを失つてからもう一年近く経つが、あのときと全く変わらない白と緑の縞模様がそこにあつた。風に共鳴するように微かな音が流れ出す。耳に心地よい、暖かな音だつた。トーンは心の中にいるはずのビオラに向かつて一人ごちた。

「もう一度、君のためにオカリナを吹こうと思つんだ」

ビオラを救うことはできなかつた。だからこそ、ビオラの心だけは救いたい。音楽の持つ表と裏の顔を知り、その力を知つた。トーンはもう昔のような無知な少年ではなかつた。

トーンはオカリナを吹いた。忘れていたかと思つたが、体が全て覚えていた。昔、ビオラと川のふもとで練習していたように、夜の池や木々と共にアンサンブルを奏でた。隣で、一緒にビオラが演奏しているような気がした。ウインドがホルンを取り出し、トーンに音を合わせる。眠っていた動物たちが目を覚まし、夜の大合奏に耳を傾けた。美しく晴れやかな合奏が、夜の森を包んでいた。

第四章・進むべき道

第四章　進むべき道

雲一つない青い空が、一行の門出を祝つかのように広がっていた。町の入り口にはすでに守備兵が旅支度を済ませ、新たに仲間となる二人の準備が終わるのを待っていた。

「逃げ出すんじゃないかと思っていたがな」

そう口にしたミンスの目を、トーンは新たな決意を秘めた目で見つけ返した。

「いい目をしてる。それが私たちの力になってくれることを信じているよ。さて、出発する前に一つ、君たちに身につけておいてほしい物がある」

そういうつて、ミンスは後ろに待機させていた守備兵を一人呼び寄せて何かを受け取ると、一人に渡した。小指の先ほどの小さな黒い塊のようなもので、触つてみるとぞわぞわとした感触がある。

「耳にいれるんだ」

二人は大きく目を見開いた。ミンスはにっこりとした表情を全く変えずに一人に頷いて見せた。トーンは思わず問い返した。

「な、なにをするつて……？」

「耳にいれるんだよ。こんな風に」

ミンスが右耳にかかっていた髪をかきわけ、耳に入っている同じ黒い塊を見せた。髪を戻し、何も心配はいらない。と付け加えた。

トーンとウインドはお互いに顔を見合させ、恐る恐る耳に入れた。風が通るような、すーっという音が聞こえてくる。話し声もしつかり聞こえるようだ。異物感がある他には特に変わった様子はない。わずかに頭が冴えたように感じる。いや、違う。なんだか十分な睡眠を取った時のような、すがすがしい気分になってきた。しかし無邪気に驚くトーンとは裏腹に、ウインドは何かを考えているように

顔をしかめていた。

「どうだ、だいぶ気分が良くなつたんじゃないか？」

「一体何をした」

棘のあるウイングの声に、ミンスは小さくため息を漏らす。
「別に悪さしようというわけではない。それはNoise Reduction and Care-inというて、超小型のコードレス型イヤホンになつていて。通称NRCと呼ばれているそれは、人間の耳には聞こえない、又は気分を害するような音をある程度遮断する効力がある。また耳の情報から体の健康状態を検知し、体の不調を和らげる薬を投与する機能も持つている。もし昨日眠れなかつたのなら、十分眠つた後のようになつて頭がすつきりしているはずだ」
まさしくその通りだ。トーンは頷いた。

「それだけじゃない。こんなことも可能だぞ」

ミンスがくすっと笑い、こちらの反応をうかがいながら右耳に手をあてて小声で何か話し始めた。すると突然、NRCと呼ばれた物を入れた耳からミンスの声が聞こえてきた。トーンは右に、ウイングは左に思わず振り向き、お互ひの顔を見合わせて恥ずかしそうにははつと笑つた。

「NRCを軽く抑えながら話しあうすれば、声の振動が手を伝わり、NRCを身につける全ての者に声を送ることができる。これがあれば自分の間は空氣の調律が乱れた場所にいつても、長い時間滞在できるはずだ。まあ、あくまでも応急処置に過ぎないがな。たつた一日で作つたにしては、いい出来だろう」「ううや、昨日の事件と聞き出した情報をもとに作り出したものらしい。ウイングも驚きを隠せない様子だった。機械のはずなのに、それを全く感じさせない。

じついうものも、空氣の調律を乱す原因になつていてるのだろうか。
「少しあは長く、生きていられるかもしないな」
やうじうウイングの声は、どこか嬉しそうだつた。

一行は、瓦礫の山と化したコントラスを超えて、東にあるバンジョーへ向かつた。コントラスに足を踏み入れたとき、トーンとウインドはすぐに空気の異様な変化に気付いた。侵入者をその地に引きずり込むようなねつとりとした感覚が全身にまとわりつき、一步進む度に体が重くなつていくように感じられた。NRCを装着していなければ、今頃瓦礫の一つとなつていたのではないかとトーンは思い、落ちてしまわないように耳を押さえながら歩いていた。

バンジョーに着くとすぐに待機していた守備兵が現れ、ミンスに早口で報告を済ませた。どうやら昨夜のうちにここでリードらしき人物を目撃したという報告があつたらしげ、それ以降姿を見た者は一人もいないらしい。まずは情報を整理するためにミンスは側近の守備兵を連れてバンジョーの機械警察支部へと向かい、他の者はひとまずホテルで待機ということになった。

ホテルに向かうまでの間、トーンは所狭しとそびえ立つ壮大な建物に目を向けていた。今にも空を突き破つてしまいそうなくらい高い建物や、いくつもの四角や丸で構成された建物、縦に長いドーム型の建物の上に輪を描くように複数の大きな玉が乗つた奇妙な建物など、見たこともない巨大なものがあちこちに広がっていることを思ふ少なからず興味を覚えたが、これらが全て機械で作られたことを思うと、いらだちを覚えずにもいられなかつた。しかし何よりも驚いたのは、これでもかといふほどたくさんの守備兵の存在だつた。一分に一回はどこかで守備兵の姿を見かけ、道行く人に何かを聞いている者もいれば、忙しそうに走り回つている者もいた。大きな町ほどたくさんの守備兵が警備していると聞いたことがあるが、まさかこれほどまでとは。もっと大きな町では一体どうなつてしまつただろうか。

ホテルで一行が通された部屋は、守備兵さえも感嘆のため息を漏らすほど豪華だつた。十人ぐらいは余裕で入れそうなほど広い空間が広がり、四隅に置かれた傘つきの証明が淡い光を部屋全体に落としている。二つ並べて設置された幅広のベッドにはシルクの布団が

かけられ、窓から差し込む光で黄金色に輝いていた。ガラス戸の先には小さなテラスがあり、そこからバンジョーの半分は見渡せるのではないかと思うほど壮大な景色が広がっていた。

「しばらくはここで監視を続けることになった」

部屋にやつってきたミンスが、全員を集めて説明を始めた。

「未だにリードの居所はつかめていないが、先ほどこの町にもコントラスと同じ、異常なまでの低周波が流れていることがわかった。被害は出でていないようだが、今後何が起こるかわからない。トーンとウインドには低周波の発生源を調査してもらい、他の者はここから町の監視を行つてもらつ。まともな機材がなくてすまないが、人で頑張ってくれ」

「あれだけの守備兵で見つからないのなら、もうここにはいないんじゃないかな？」

ウインドの問いに、ミンスが頭をかきながら答えた。

「確かに今は通常の三倍の兵で町の調査にあたっているが、いかんせん手作業でな。これまで機械に依存してきた私たちにとつては、未だに調査の手が伸びていない地区があるほど警備体制も動く者も上手く機能できていない。それに他に情報がない以上、ここを離れるわけにもいかないんだ」

「探すとはいっても……」

トーンが不満そうに口を開いた。

「これだけ広いと、何日あっても探しきれないよ」

心配ない、というようにミンスは頷くと、テーブルの上に一枚の大きな地図を広げた。

「バンジョーは東西南北で地区が分かれているんだが、特に西地区全体で異常が確認されている。ホテルを出て左側の道沿いを歩いていけば看板があるから、そこまで行けばあとは看板の示す道を進んでいけば着く。心配なら守備兵を一人案内役として連れて行つても構わないが？」

「大丈夫だ。一人で行ける」

トーンはウインドに怪訝な表情を浮かべたが、答えが返ってくることはなかつた。

「何故せつかくの案内を断つたんですか?」

次の日、朝食を済ませたトーンとウインドは早速西地区へと向かつていた。

「朝晩ずっと監視されてると思うと、頭がおかしくなりそうだからな。それに……」

ウインドの視線の先に、西地区と書かれた矢印形の看板が見えた。「案内されるまでもない」

しかし西地区に入つてから何時間か歩き回つたが、収穫は全くといつていいほどなかつた。微妙な変化ではあつたが空気の流れがかしいことには気付いていた。流れを辿つていこうと試みたが、途切れ途切れになつていて上手くたぐり寄せることができずについた。流れているというより、その場に漂つているみたいだ。ウインドが風の音に耳を傾けてみても、高層住宅が立ち並んでいるせいか上手く音を聞き取れないのでいた。

諦めて戻ろうとした矢先、ふとどこかから何かを叩くような音が聞こえてきた。中通りの途中、建物と建物の小さな隙間の先に、古ぼけた建物があるのを見つけた。先ほど反対側を歩いたときは気付かなかつたが、建物の見える方向から奇妙な音が聞こえてくるのがわかる。

隙間を抜けてすぐ、一人は異常な低周波の原因がなんであるかを理解した。起動停止命令を受けたはずのオートマシンや、機械音をまき散らしながら活動する機械が当たり前のように使用されていたのだ。頭に突き刺さるような音が次々と二人に襲いかかる。気分が悪くなってきたウインドは町に戻ろうと後ろを振り返つたが、そこで予想だにしなかったものを見た。

がつしりとした体格の男が三人、不気味な笑みを浮かべながら隙間をふさぐようにして目の前に立つていた。構わずに間を抜けてい

こうとしたウインドが、真ん中のはげた男に腹部を思い切り殴られ、倒れそうになつたところにさらに蹴りを入れられて、トーンの隣まで吹き飛ばされた。

「おい、何するんだ！」

トーンが慌ててウインドを抱き上げると、額に汗が浮かんでいるのが見えた。苦しそうな表情は、殴られたからだけではないことをトーンは十分承知していた。

「頼むからそこをどけてくれ。仲間が苦し가つてるんだ」

全身毛むくじやらの男が口を大きく開けて笑つた。

「何言つてやがる。生意氣なくそガキが」

「こいつら、ここのもんじやねえな」

レンズの片方がすすこけた眼鏡をかけた別の男が、トーンの服装に気付いて眉をひそめた。「最近守備兵が増えたことと何か関係があるかも知れねえ」

「おいおいまじかよ」はげた男が慌てた口調でいった。「ここが知れたら、俺たちの苦労が水の泡だ。相手はたかが一人だ。殺つちまうか？」

三人が討論を続いている間も、ウインドの容態は悪くなつていく一方だつた。トーンはあることに気付いて耳を押さえると、様子を見計らつて小さく口を動かした。

「ち、このくそガキ！」

トーンの行動に気付いた毛むくじやらの男がトーンを地面に叩きつけたが、思い切り振り下ろされた足はトーンの体を避け、服を踏みつぶした。その拍子に、何かが碎ける音が聞こえる。

トーンはがばつと起きあがつてポケットの中身をのぞき、震える手で中にあるものを取り出した。

「そんな……嘘だろ……」

手のひらには、粉々になつたオカリナの木くずだけが乗つっていた。はつと、もう一方のポケットに手を回した。布越しにオカリナの形を感じて、ほつと胸をなで下ろす。家から持つてきた形見のオカリ

ナは、幸い壊れてはいなかつた。

「今度おかしな真似してみる。今度はぶち殺すからなー！」

「誰を殺すつて？」

それは、ミンスの声だつた。

「私の客人が迷惑をかけたみたいで、すまなかつたね。よければ返していただけるとありがたいのだが？」

ミンスの胸元に取り付けられた徽章を見て、はげた男が目を大きく見開いた。

「ち、守備兵隊長直々におでましつてか」

「ふざけるな！」眼鏡の男が叫ぶ。「あんたもこいつらも、こじを見ちまつた以上生きて返すわけにはいかねえんだよ」

「起動停止命令に反する機械の使用及びオートマシンの無断利用と、その隠匿行為。君たちの残りの人生をオリの中で過ごさせんには十分すぎるくらいだな。今すぐこの一人をこちらに引き渡し、使用している全ての機械を停止させれば、今回のことは見なかつたことにしてやる。どうだ？」

男たちは何もいわず、困惑した表情を浮かべてミンスを見た。それを了解と受け取り、ミンスは足早に倒れているウインドのもとへ行き、続けてトーンを見た。唇が切れ、口から血が流れている。

「立てるか？」

トーンは小さく頷き、ウインドを担いで歩き出すミンスの後をついていった。

「汚ねえぞ……くそ！ 機械が無くなつたら、これから俺たちはどうやって食つていきやいいんだ！」

隙間を抜けて中通りに出る途中、男の悲痛に満ちた叫びが聞こえ、その言葉がトーンの頭の中で何度も反芻していた。

「……おかしいな」

ミンスが言葉にしなくとも、誰もが思つてゐることだった。トーンとウインドがあの町を見つけてからもう一週間近くが経つが、全

くといつていいほど何も起きていない。結局低周波はあの町で使用されたいた機械を止めたことで解決され、それ以降何も新しい情報は入つてこなかつた。

すっかり回復したウイングがずっと想つていたことを口にした。

「リードがいたという情報自体、嘘だつたんじゃないのか？」

「NRCを介しての報告だつたんだ。やろうとしてできることじや

」

ミンスはまつとして口に手をあてた。

「まさか、囮……」

次の瞬間、耳元でミンスの予感を的中させる声が響いた。

「守備兵に伝令！ クラッパー並びにシターンの機械警察支部に保管されていたオートマシンが暴走、町で破壊活動を行つている！ 近くにいる者はただちに救助に迎え！ 同時刻に不審な音楽が町中に鳴り響いていたことから、リードがまだ近くにいる可能性も高い。発見次第ただちにNRCにて報告せよー 繰り返す……」

声の裏側からは何かが破壊される音や悲鳴のようなものが聞こえていた。

「くそ、やられた！」

ミンスが手に持つていた双眼鏡を地面に叩きつける。

「ここから近いのはどっちだ？」

「シターンなら半日で着きます」守備兵の一人が答えた。

「よし、全員すぐにシターンへ向かうぞ。トーンとウイングも一緒にぐるんだ。音による攻撃は私たちでは無力に等しいからな」

トーンはこのとき、緊張と同時に恐怖も感じていた。肩の傷がうずく……。肩を貫かれたときの、あの人殺しを楽しむかのように笑うオートマシンが頭から離れなかつた。ウイングがトーンの肩に優しく手を置いた。

「機械の暴走は、空気の調律の乱れが引き起こした一次災害だ。その乱れを直すには何が必要だ？ オートマシンが動きを止めたあの時、何が起きていた？」

はつとして見上げたトーンに、ウインドはにっこりと笑顔で言つた。

「私たちの力を、リードに見せつけてやるうじやないか」

シターンに着いたときは、もつ町の半分近くが瓦礫と化していた。あちこちで火の手が上がり、破壊音や悲鳴が止むことなく聞こえてくる。ミンスがNRCを通して到着の報告と共に次々と簡潔明瞭に指示をまくし立てる。守備兵が千々に散らばつていぐ中、ウインドとトーンも準備を始めた。

ホルンの音を調整しながら、ウインドは眼前に広がるシターンを眺めて言つた。

「届くと思うか？」

トーンがポケットからビオラの形見であるオカリナを取り出す。まさか、これを使うことになるとは思つてもいなかつた。ただ、自分と一緒に結末を見て欲しいと思つていただけだつた。壊れてしまつたオカリナに対しては未だに悔しさと憤りを感じていたが、今はそれに気を取られている場合ではないこともわかつてゐる。

「美しく調和する音楽は、宇宙までもその音を届けることができる」と、何かの本で読んだ覚えがあります」

ウインドがにやりと笑つた。それに答えるよつて、トーンも笑みを浮かべた。楽器を口に当てるときも、その笑顔が無くなることはなかつた。

命を吹き込まれた楽器は、示し合させたかのように同時にその美しい音色を奏で始めた。ホルンの音とオカリナの音が絡み合い、吹きすさぶ風に乗つてさらに遠くへと飛ばされるその途中で、風の音と砂の擦れる音、何かと何かがぶつかる音とも絡み合い、音楽をより賑やかなものにしていく。オートマシンの隙間をすり抜け、歪んだ調律を元に戻して複雑に絡み合い、やがて音だけのオーケストラとなつてシターン全体に広がつていった。ウインドとトーンは決して休むことなく、例え小石が当たろうと、砂が目に入ろうと楽器

を演奏する手を止めようとはしなかった。

二人のもとに向かっていたオートマシンが徐々に動かなくなり、やがてぱつたりと動かなくなつた。人々を襲い、町を破壊していた他の機械もすぐに動かなくなつた。燃え上がる炎はその勢いを抑え、人々は逃げることも忘れ、どこから聞こえてくる美しく賑やかな音色に耳を傾けた。ミンスや守備兵たちはみな、呆然とその様子を眺めていることしかできなかつた。

何時間経過しただろうか、シターンはすっかり静けさを取り戻していた。まだ音楽が響き渡る中、守備兵が生き残つた人々を無事に保護し、救助活動を始めていた。ミンスが現状報告を済ませようとNRCを使用したとき、ウインドとトーンは突然耳に入ってきた音に驚き、危うく楽器を落とすところだつた。一人とも全身に玉のような汗をかいいていた。胸がふくらむほど大きく息を吸い、大きく息を吐いた。静かになつたシターンを眺め、顔を見合わせてトーンは大きな歓声を上げた。

ミンスが拍手をしながら近づいてきた。

「驚いたよ。本に出てくる魔法使いみたいだつた

ウインドが肩をすくめる。

「楽器を吹いただけだ」

「報告します！」

NRCからの声だ。

「クラッパーにて、暴走した機械の鎮圧に成功しました。町も半分以上がまだ生き残っています。現在救助活動中。繰り返します……」

ミンスがほつと安堵のため息を漏らした。しかしつかの間の喜びも、慌ててミンスの元にやってきた守備兵によつて打ち捨てられることとなる。

「大変申し上げにくいのですが……」

守備兵は一息ついてからいつた。

「支部に保管していた鍵が……無くなつてしましました」

トーンにはそれがどんな意味をさすのかわからなかつたが、ミン

スは頭を殴られたような衝撃を受けている。

「最後に管理していたのは誰だ？」

怒りのこもった問いに、守備兵は怯えながら答えた。

「私は。しかし突然のことで慌てて避難してしまったもので、鍵は……」

ミンスが守備兵の胸ぐらを掴む。

「何故持つて避難しなかった？　あれがもし盗まれたりでもしたら

胸ぐらを掴んでいた手の力が弛むと同時に、ミンスは蒼白な表情を浮かべた。守備兵が苦しそうに咳き込む。

「まさか……」

ミンスは近くの守備兵にコントラスで保管されているはずの鍵について調査記録を調べさせ、小型電話機を受け取ってクラッパーに連絡を取つた。話を進めていく内に、より一層顔が青白く変わっていくのが一人にもはつきり見て取れた。しばらくして電話を切り、守備兵から結果を聞き終えると、ミンスは驚くような一言を口にした。

「リードの目的がわかつた」

しかし、二人は全く話しの流れが理解できなかった。ミンスは二人にわかるよう、ゆっくりと順序立てて説明した。

「いいが、まずリラという楽器を知っているな？　ダイヤグラム大陸を死の大陸から復活させた伝説の吟遊詩人が使っていたとされる楽器だ。それが、パンの機械警察省本部の倉庫で厳重に保管されていることも、知っているな？」

トーンが頷く。ウインドは表情も変えずに黙つていた。

ミンスは続けた。

「リラを取り出すまでには、全部で六つの鍵を開けなくてはいけない。大陸全体でそれを管理しようと、六つの町で一つずつ鍵を保管することになった。それが、コントラス、シターン、クラッパー、西の山を越えた先にあるゴルペット、大陸の中央にある一番大きな

町ミルリトン、吟遊詩人の住む町メトラだ」

トーンは驚いてウインドの顔を見たが、その表情には何も映つていなかつた。まるで全てを知つてゐるような、そんな予感さえ感じられた。

「そのうち三つの町が襲撃を受けた。しかしここで不自然なのが、目撃情報がありながら襲撃を受けなかつたバンジョーだ。バンジョーには鍵が保管されておらず、これまで襲撃された三つの町全てで、保管されていた鍵が行方不明になつてゐる」

ウインドが初めて口を開いた。

「リードは鍵を狙つて警備を攢乱するためにバンジョーに訪れ、手薄になつたクラッパーとシターンを襲い、両方の鍵を手に入れた」たんたんと話すウインドに、トーンは違和感を覚えずにはいられなかつた。

「確証はないが、それ以外には考えられない。リードはリラを手に入れて、何かを起こそうとしているんだ」

ミンスは機械警察省に連絡を取つて鍵がなくなつたことと、鍵こそがリードの狙いだらうと報告し、各支部に鍵の警備を強化するよう伝えた。遠くから救助活動に励む守備兵の声や瓦礫の崩れる音が聞こえてくる。トーンは持つていたオカリナをしまい、自分の手で救つた町を見渡した。ビオラは見ていてくれただらうか。なぜ私は助けられなかつたのかと怒つてはいだらうか。空を見上げると、天辺に昇つた丸い月が淡く輝き、それに呼応するように見たこともない数の星がきらきらと瞬いていた。

戦いはこれからだ。きっとビオラは笑つて見てくれるだらうと、トーンは思つていた。

第五章・迫られた選択

第五章　迫られた選択

トーンは突然の物音に目を覚ました。

暗くてよく周りが見えなかつたが、横になつているベッドは、シターンに宿を取つてついたさつき眠りについたベッドと全く同じだつた。

部屋が異常に寒く感じたが、よく見ると部屋の窓が開いていて、それが外からの風を受けてがたがたと音を鳴らしていた。

ベッドから起きあがり、冷えた体をさすりながら窓を閉めて鍵をかける。

もう一度寝ようと振り返ったとき、視線の先につつすらとあるはずのない影を捉えてトーンは心臓が飛び出しそうになつた。

月明かりに照らされた薄い夕焼け色の髪を、トーンはどうかで見た覚えがあつた。

「また会えたね」

少し高い幼さの残るよつつな声……

それは、ウインドと一緒にメトロの池のほとりで聞いたときの声と、全く同じだった。

「リード……」

自分の名前が呼ばれるのを聞いて、リードは小さく微笑んだ。

「嬉しいな、覚えていてくれたなんて」

まるで何年も会っていない友達がいつような言葉に、トーンは田の前の男が一瞬本当にリードかどうか分からなくなつた。

リードと云う青年は、コントラスを壊滅に追いやり、クラッパーとシターンの暴走を起こした張本人だつたはずだ。

実際池のほとりで襲われた時は、機械への、機械を使用する人間への恨みや憎しみに溢れていた。

しかし田の前にいる人物は、名前を覚えられていただけで子供のように無邪気な笑顔を浮かべている。

まるで同一人物とは思えなかつた。

ZRCを介して会話をすればすぐこじでも誰かがきて、リードは取り押さえられて事件は解決するだろう。

しかしあのときからずっと頭のすみに残つていた思いが、トーンにやがてせなかつた。

「……一体何のよつだ。何をしにきた」

「そんなに構えないでよ。別に争いに来た訳じゃないんだ。振り回される君があまりにもかわいそつたから、

力になつてあげられないかと思つてね」

トーンが顔を歪ませる。

「別に同情される覚えもないし、力を借りる筋合もない」

「ダウンタウンで壊されたオカリナ、大切なものだつたんでしょう？」

トーンは目を大きく見開いた。

ダウンタウンでの一件を知つているのは、ウインドとミンス、それに三人の男だけのはず。

どこかで見ていたとしても、リードも吟遊詩人だ。
あの環境下でまともにいられるはずがない。

ウインドはじうやつてホテルに戻つたのかすら覚えていなかつたのだから。

そんなトーンの様子に気付いたのか、リードは軽く笑みを浮かべていつた。

「君がオカリナを初めて吹いた頃から知つていたし、
ダウンタウンに迷い込んだ時のことも、この町を救つた時のこと
も知つてる」

トーンのいぶかしげな視線に気付き、リードは言葉を切つた。
しかしあまり長い時間話しをしている暇もなさそうだった。
風がざわついている。

「詳しいことは、また今度話すことにするよ。時間もあまりなさそ

「うだし」

「！」のまま、何事もなく帰れると？」

「帰れるよ。僕の話を聞けば、君は何もできなくなる」

「まさか」

トーンは鼻で笑つたが、内心は不安でいっぱいだった。
池のほとりで襲われるまでは一度も会つたことも聞いたこともなか
つた男が、
自分が音楽を始めた時から知つてているといつ。

オカリナを壊されたことを知つていて、冗談でいつていても
思えなかつた。

もしかしたら、自分も知らない何かを知つていてのかも知れない。
そんな気持ちさえしていた。

「もう知つてると思つけど、僕は鍵を探している。
残りは三つ。

どこにあるかはもうわかつてるんだけど、どうにも僕一人じゃ難
しそうなんだ」

トーンは肩をすくめた。

「ばかばかしい。いや、話しを聞いた僕がばかだつたよ。
大体協力して何の得があるつていうんだ」

「大切な人を、生き返らせてあげることができない」

時間が止まつたかのように、トーンは目を丸くしたままその場に立ちつくしていた。

確かめるように、頭の中で今の言葉を何度も繰り返す。

追い打ちをかけるように、リードは言葉を継いだ。

「リラには、命を紡ぐ力が込められているんだ。

君は、何故大切な人が死んだのか、もう氣付いているんだろう？
この大陸を元の姿に戻して、機械に苦しむ人々を助けてあげたいとも思ってる。

機械がある限り、本当の幸せはやつてこない。
現実を見よ。

機械は君に、君の周りに幸せを届けてくれたかい？
他の方法なんてない。

機械を葬り去ることだけが、この大陸を救う唯一の方法なんだ。
でもそれを実現するためには、君の素敵なお音楽がどうしても必要になつてくる。

もし後ろめたさを感じているなら、それは逆だよ。音楽は人を救うものなんだよ。

それなのに、人を苦しめる側に味方する方が音楽を汚しているとは思わないのかな。

君の力で、音楽を本当の姿に戻してあげよう。
蘇る大切な人への帰ってきた贈り物としてさ」

トーンは胸が高鳴るのを感じていた。

死んだ人間が生き返るはずなどありえない。

しかしリラが死んだはずのダイヤグラム大陸を生き返らせたというのなら、

不可能ではないかもしない。

それに、機械がなくなれば母の苦しむ姿もまつ見なくて済むのだ。

「答えは今じゃなくていいよ。

君が決断したとき、またやつてくるかい。呪い答えが聞けるといな」

そういうリードは暗闇に隠れたかと思つと、二つのまにか音もなく姿を消していた。

窓が風を叩く音が聞こえる。

トーンにはまるでそれが、

現実といつ世界に閉ざされた自分を助け出せりと呼びかけてくるよう聞こえていた。

ビオラが少し先を歩いている。

腰まで伸びた赤い髪は相変わらずで、風に揺れる度に川のせせらぎが聞こえていた。

笑顔でひびきを振り返り、早くおいでよと手招きをして見せる。

しかし走り出をつとしたとき、突然彼女の腹部を何かが貫いたかと思つと、

口から血を吐き出して力なくうなだれ、ずるりと落ちて地面に消えていった。

その先には、メトアで自分を襲つた、あのオートマシンの姿があつた。

あのとれと回じみつて、あれ笑つかのよつて顔を上下に揺りしつて……。

トーンはがばつと起きあがつた。

辺りを見渡すと、何も変わらないシターンの寝室が田に入つた。全身にあふれ出した汗で服が体にまとわりつく。

「夢……か……」

トーンは両手で顔を覆つた。

あふれ出す涙は、それでも抑えることはできなかつた。

次の日の朝、メトラにも保管されているという鍵の所存を調べるために、

一行は一回メトラへ戻ることになつた。

昨夜の一件については、誰も気付いてはいないう�だつた。

トーンの目が真つ赤になつっていたことも、

ウインドがただ一言「大丈夫か?」といつただけだつた。隠し事をしている自分が恨めしかつたが、驚いてもいた。昨夜のことを告げれば、きっとすぐにでもリードを捕まえられ、多くの人々を救うことができる。

でも、本当に助ける必要があるのであらうか、本当にそれが正しいのだろうかと考えている自分に……。

自分を呼ぶ声に、トーンはまつと我に返つた。
ミンスがため息をついていった。

「疲れているとは思うが、ゆっくり休ませることもできなくてな。
さて、聞いていなかつたようだからもう一度聞くが、
トーンはメトラに保管されていたという鍵について、
何か思いあたるようなことはないか？」

思ひ当たるまいが、トーンはこれまで鍵の存在自体聞いたことがなかつた。

「ワインドはどうだ」

「初耳だな」

ワインドは外を眺めたまま簡単に答えた。
そもそもメトラにあるということ自体、誰かが陥れるためについた
嘘なのではないだろうか。

しかし、ワインドはそう思つてはいないようだつた。

「ワードの住んでいた家なら知つているぞ」

なんとなくすゞこ家を想像していたが、
着いてみるとなんてことはない普通の一階建ての民家だつた。
長い間誰も住んでいなかつたようで、
窓は中の様子が確認できないほどにすっかり汚れていた。

ミンスが扉を押し開け、様子をうかがいながら中へと入っていく。
トーンは一度外を見渡してみたが、
真夜中だつたおかげで誰かに見つかるようなことはなさそうだった。

建物の中は非常によく整理されているように見えた。木製のテーブルの上に置かれた空のティーカップだけが、ここに人が住んでいたことを示していた。

「 ウィンドが口を開いた。

「 私とトーンで一階を調べるから、ミンスは一階を頼む。一階はそれほど広くなかったはずだから、一人でも十分だ」

ミンスが辺りを見渡しながら答える。

「 それはいいが、階段はどうだ」

「 そこ」の扉を開ければ、隣に見えるはずだ」

ウィンドが指さした扉の隣に、一枚の大きな写真が飾られてあつた。

楽器を持った男が四人並んで立っていて、足下には「親愛なる仲間たち」と書かれている。

ホルンを持っている男は、ビートなくウィンドの面影がある。ミンスが扉を開けて階段に気付くと、

おかしな真似をするなよと釘をさして一階へと上がつていった。

「 さて、私たちも始めるか」

トーンはふと、疑問に思つたことを口にした。

「 リリに鍵が?」

「わからんから調べるのさ。私は右の部屋を調べるから、トーンはここを頼む」

小さくため息をついて、トーンは自分の調べる場所をもう一度見渡した。

きれいに片付けられた台所に、中央にティーカップが置かれた木製のテーブル、

壁沿いに立てかけられた背の高い棚には、音楽の本が敷き詰められている。

何かを隠せるような場所は特に見当たらない。

台所へ行き、手当たり次第引き出しの中や棚の隙間などを調べてみたが、見つかったのは折れ曲がったスプーンと先が欠けたさいばしだけだった。

棚の本も全て取り出し、棚自体も、本も一冊一冊調べてみたが、途方のない数に途中で投げ出してしまった。

本を再び棚に戻そうとしたとき、ふと一冊の本の表紙に目がいった。

紫色や白色の四枚の花びらが密集した花が描かれていて、その下には手書きで「リラ」という文字が刻まれている。

名前が妙に引っかかるてめくつてみると、そこには表紙の花の絵ではなく、

何度も別の本で見たことのある、伝説の詩人が使っていたといわれているリラの絵や説明が書かれていた。

『中空の共鳴箱からなるフレームは、自然界に存在する様々な音と共に鳴り、

より豊かで生き生きとした音楽を生み出す』ことができる。』

『リラの本質は美しい音楽を紡ぐための構造ではなく、響き渡る音楽そのものに存在する』

これほど詳細が書き込まれた本は見たことがなかった。
しかしバラバラとめくつてみると、実際に使われているのは初めの一十ページほどで、
残りは紙ではなく固い白い箱のようなものが取り付けあってただけだった。

真ん中にくぼみがあり、何かが入っていた形跡があったが、それが一体何なのかトーンには見当がつかなかつた。

再び棚に本を戻していたとき、隣の部屋から自分を呼ぶ声が聞こえてきた。

トーンが部屋に入つたとき、
ワインドは天窓から差し込む光に照らされるようにして置かれていた
小さめのテーブルの前に立ち、一つの「真立て」を手に取つて眺めていた。

そこから振り向くことなく、突然ワインドが問い合わせてきた。

「君は、リードに会つたことがあるのか？」

トーンはまごつとしたが、穴が開くほど「真立てを見つめるワインドを見て、

とつたに話題を変えようつと口を開いた。

「その写真に、何か書かれていたなんですか」

「この女性に見覚えはないか?」

手渡された写真を見ると、

三十歳くらいの女性が幼い男の子と女の子を両腕に抱えるようにしている姿が写っていた。

しかし女性には全く見覚えがなかつた。頭の中に残つている記憶を掘り出してみても、思い浮かばない。

「大人の方ではないぞ、手前の子供の方だ」

まだ七、八歳くらいの少年と少女が女性の腕を片方ずつ抱くようにして、

満面の笑顔でこちらを見ている。

ふと、トーンは何かが引っかかるのを感じた。
別におかしいというわけではない。

ただ、何か引っかかる。

一体何が

最初に気付いたのは、男の方だった。

つい数時間前に暗闇にうつすらと見えた微笑んだ口元と、全く同じ
だつたのだ。

だが別に驚きはしなかつた。

リードの家だというのだから、幼い頃の一枚や一枚飾られていても
何もおかしくはない。

問題は、ウインドのいう少女の方だった。

見たことがない。そう信じたかった。

自分の頭で考えていることが嘘であつてほしいと願った。

しかしじれだけ呼び覚ました記憶を振り払おうとしても消えることなく、

やがて様々な思い出がトーンの頭の中に溢れ出した。

「ビオラ……」

「やはりそつか」ウインドが写真立てを奪い取る。

「ビオラ・メロディオン。彼女の音楽は私も聴いたことがある。純粋で透き通った美しい音だった。

もちろん、君と一緒に演奏していたことも知っている。

彼女が亡くなつたとき、君がそれを見届けたことも。

しかしじつやら、君は彼女の兄が誰であるかを知らなかつたようだな。

それは何故だ？

彼女の姓を知らなかつたのか、それともただ知らない振りをしていただけなのか。

自分に、疑惑が向けられないように

突き刺さるように冷たい声だった。

しかしそれ以上に、トーンは憤りを感じていた。

何をいつているのかさっぱりわからない。

ビオラの姓は確かに今初めて知つたことだし、リードとビオラが兄妹など知る由もない。

だからといって、何故そこまで冷たくする必要があるのか。

「随分な物言いだね。まるで僕がリードの味方だとでもこいつかのよ
うな口振りじやないか」

ウインドがトーンを睨み付けた。

「では聞くが、昨日の夜は誰と話していたんだ」

トーンは言葉を失つた。

視線をまともに見返すことができなかつた。

まさか、あの時のように風の音を聞いてわかつたといふのだろう
か。

しかし、正直に話すわけにもいかなかつた。
ビオラとリードが血のつながつた兄妹であることを知つて、
復活といつ一文字が現実味を帯びてきたようにも感じていた。

彼女の生還を願つているのは、自分だけではないのだから。

「別に君を疑つてゐるわけじゃない。

真実を知りたいだけだ。

昨日、リードと何を話したんだ。何を吹き込まれた?
君には間違つた道を歩んでほしくないんだ。
だから正直に

「

ウインドの言葉は、二階から聞こえてくるソングスの声によつて中
断された。
何かを見つけたらしい。

ウインドはしばらくどうしようかと迷っていたが、

再び一人を呼ぶ声が聞こえて仕方なく返事を返し、部屋を出て行った。

トーンはほつと胸をなで下ろしながら、ウインドの後についていった。

ミンスのいる部屋は書物や紙が足場もなくなるほど散らばっていた。

その奥の、ほぼ空になつた棚の前にミンスは立つていた。

部屋の惨状に呆気にとられている一人に向かつて、ミンスは急かすようにいった。

「どうした、早くこっちに来てくれ」

部屋を散らかしたことには全く気にしていないようだ。
書物や紙を横に避けつつ道を作つてなんとかたどり着くと、
ミンスは持つっていた一冊のノートを開いて一人に見せた。

何から切り抜かれた大量の記事が一枚一枚にびっしりと貼られ、必ず記事の隣にはそれを貼つたであろう日時が書き記されていた。
最も古くて五年前の一月、四年前の三月で記事は終わっている。

『伝説の楽器不法所持。吟遊詩人の女性を逮捕』
『裁判中に女性が原因不明で倒れ、意識不明の重体』

貼られている記事は全て特定の女性についてのものばかりだった。
トーンは記事に書かれたある文字を見て、ウインドの方に振り返った。

「二人の子を持つつて……」

ノートをめくつながら、ウイングは答えた。

「ああ、リードの母親のことだ」

「知つてこるのか?」ミンスが驚きの表情を向ける。

「リードとは以前吟遊楽団で一緒にいた。母親の顔と名前くらい知つている」

「ふむ……」

ミンスは額に手をあてて、何かを考えているようだつた。

トーンはウイングからノートを受け取ると、もう一度一枚一枚の記事に目を通していった。

小さな記事もあれば、一ページを丸ごと使つほど大きな記事もあつた。

「伝説の楽器」といつ言葉が扱われているものは比較的記事が大きいようだ。

『オルガ・メロディオン。病院で心臓発作を起こして死亡。原因は不明』

最後のページにぽつんと貼られたこの小さな記事は、何だか切なかつた。

まだ一枚ページがあつたことに気が付いてめくつてみると、そこには殴るような字でこう書かれていた。

『機械の歪んだ音が、僕の家族を引き裂いた』

考え方をしていたミンスが、よつやく口を開いた。

「母親がリラを持っていたことと、リードがリラを手に入れようと
していることと、
何か意味があることとか。」

リードは奪おうとしているのではなく、母から奪った楽器を取り
戻そうとしているのか？」

誰も答えることのできない問いかけだった。
だが一つだけ、母と妹の死がリードの行動を駆り立てているのは確
かなように感じられた。
リードはリラを手に入れて何をしようとしているのか、トーンにだ
けはわかつていた。

突然ミンスの腰元から音が鳴り出した。
ミンスは慌ててかかつた服をめぐり、腰にかけられていた赤く点滅
する装置に手を当てた。
赤い点滅が消え、青く点灯する。

「リラ、ミンス」

いいかけて、ミンスは顔を強ばらせた。

何かが聞こえているのか、虚空の一点を見つめたまま微動だにしな
い。

額から汗が流れ、頬を伝つてぽとりと床に落ちた。

自分の心臓の鼓動が聞こえるかと思つほど、重たい沈黙が部屋の中
全体を覆っていた。

しばらくして装置から手を離したかと思つて、コードに関する資料を手早くまとめ始めた。
ウイングが慌てて口を開いた。

「何があった」

「今度はコルペットだ」

それで全てを伝えたといつよつな口調でミンスが答えた。
手は動かしたままだ。

「町の四割程度が破壊されているらしいが、これまでより破壊の進行が遅いらしい。

今からすぐに向かえばまだ可能性はある

「鍵は?」トーンが聞いた。

「それを奪われない可能性だ。
まだ守備兵が厳重に管理しているそうだ。
コルペットはもともと多くのオートマシンを配備していなかつた
から、
それが功を奏したんだろう」

まとめた資料を脇に抱えてミンスは立ち上がり、
窓からのぞく崩れたコントラスの外壁を眺めながら言葉を継いだ。

「今回の戦いは、勝てるかも知れない」

勝てるかも知れない　　その言葉に一瞬でも不安を覚えたことに、
トーンは気付いた。

何が正しいのか、どうすればいいのか。

答えはまだ、心の中でぐずぶつたままだった。

メトラの入り口まで来たところで、一行の元に一人の女性が訪ねてきた。

短く刈り取られた金色の髪と鍛え込まれた体から、トーンはすぐにどこかの守備兵であることに気付いた。

ところどころに巻かれた包帯を見るに、恐らくメトラの病院で治療を受けていたのだろう。となると、コントラスの被害者だろうか。

ミンスが用向きをたずねると、女性は守備兵のそれじへ姿勢を正して答えた。

「コントラス第十八守備隊員、ビーナ・ベルローズになります。先日のここでの件、私も拝見させていただきました。聞くところによれば、また騒動が起こっているとか。もしよろしければ、私もご同行させていただけないでしょうか」

ミンスは間髪入れずに突き放すような口調でいった。

「けが人は足手まといになるだけだ。せつかく助かった命だ。それを無駄にするな」

背を向けて装甲車に乗り込もうとしたとき、ビーナと名乗る女性は沈んだ声でいった。

「全てを失ったあげくの命に、何の意味があるというのですか」

力強く握られたビーナの手は、微かに震えているように見えた。

「『』の前の事件で、父も母も、夫や子供も友達も何もかも失つて、今まで生かされました。そんな私には、事件を起こした犯人を捕まえて仇を取る以外にもう生きる意味はないんです」

トーンはウインドの顔を見た。

悲劇の女性を眺める表情は、どこか同情を感じさせるものがあったが、それはトーンの期待していた表情ではなかつた。

「ソントラス、シターンと二つの町を見て歩き、惨状を目の当たりにしてきたが、一度も同情や悲哀を覚えたことはなかつた。

機械派が音楽派に対してやってきたことと何も変わらない。死んで離ればなれになるより、生きて離ればなれにされる方がよっぽど辛いことをトーンは知つていた。

メトラを離れてからこれまで、母を考えないことはなかつた。

だからこそ、ウインドの表情は理解できなかつた。
機械派の力が強まつてから吟遊詩人がどんな扱いを受けてきたのか
も、事件の原因が何であるかも知つてゐるはずのに……

ビーナの元に歩み寄り、顔を胸に抱きしめてミンスはいつた。

「少しでも被害者を出さないようにする」とが、私たち守備兵の仕

事だ。

殺すことが仕事でもなければ、死にっこいことが仕事でもない

リードだって被害者には変わりない。

母と姉を失い、それでも必要とする全ての人々に音楽を捧げようとした彼を、

機械派は裏切ったのだ。音楽を壊すという形で。彼は誰が救つてくれるのだ？

ジオラが機械のせいで苦しんでいたときに、お前たちは何をしてくれた？

「これから早急にコルペットへと向かう。

命を粗末にするような行動はせず、怒りに身を任せないと誓ってくれれば、

連れて行つてやるわ。

一緒にリードを止めるんだ

リードが止めようとしているのは、全ての生命に迫つている危険だ。

リードを止めることは、一時的な幸せと平和を手に入れることだしかない。

危険が無くなれば再び機械は動き出し、さらなる調律の乱れを引き起こすだけだ。

「間違つてゐるのは、僕たちなんぢゃないだろつか

思つていたことがそのまま口をついてでた。

全員の視線がトーンに向けられる。

ウインドの表情からは何も読み取れなかつたが、

少なくとも、悲哀とこうよいうな感情は浮かんでいなかつた。

「だつて、そだろ。」

機械から発せられる音は空氣の調律を乱し、やがて人体に影響を及ぼし、生命は死に至る。

リードがやらなくたつて、そのうち自然に人は死んでいったんだ。ひつやつて事件が起きず、先に吟遊詩人が死んでしまつたりでもしたら、

それこそ望む手なしだ。

そう考へれば、むしろ感謝すべきなんじゃないか。
彼がリラを手に入れようとしているのも、
歪んだ調律を元に戻そとしてくれているからかも知れないじゃないか。

昔のダイヤグラム大陸を復活させたみたいに

ミンスはトーンを睨みながら口を開いた。

「それだつたら、わざわざ町を破壊する必要なんてないじゃないか。
話しきをすれば済むことだ」

「音楽派の話なんて馬の耳も貸さうとしなかつたのは誰なんだよ。
さつき被害者を出さないことが仕事だつていつたけど、僕たちには何かしてくれたか？」

音楽派が抗議したとき、まるでひつむきにほえのようにあじらつたのは
機械派の方じゃないか

「それは違います！」

ビーナが前に出て叫んだ。

「あの抗議があつた後、コントラスの全守備兵が集められて調査を行いました。

けれど結果、何も見つからなかつたんです

「当然だ。お前たちは何もわかつていなかつたんだからな

ずつと黙つていたウインドが突然口を開いた。

「異常音の存在に気付けたのはリードの著しい攻撃があつたからこそであつて、普段は非常に僅かな量しか発生していない。

その僅かな量が積もりに積もつた結果、機械塔の悲劇を招いた。わかるか？

機械の音が空気を乱すことがわかつたのは、全てリードのおかげなんだ。

目の敵にしている存在が、眞実を教えてくれたんだ」

ビーナは信じられないという表情でウインドを見つめ、次にミンスを見た。

その目は、誰が敵で誰が味方なのかわからぬといった、怯えたような目つきだった。

ウインドはトーンに向かつていった。

しかしそれは、トーンが思つていたよつた言葉ではなかつた。

「だがトーン、勘違ひするな。別にリードの今の行いが正しこと書いているわけじゃない。

彼は間違ひを正すべく行動している。

それは確かだ。

しかしあの時私がいつたように、無用な殺戮を起^こす」ことは正しいことではない

「殺戮を起^こしているのは機械派が作りだした機械だ」

「じゃあ聞くが、機械を混乱させて殺戮兵器としたのは何だ。
リードでも機械派の人間でもない。

音楽そのものだ。

リードは愛する音楽を使って人殺しを誘発した。

そこには何の罪もない、ただ力に負けた哀れな人間もいたかも知
れないが、

誰彼構わず殺したんだ。

音楽で。

ジオラがこよなく愛した音楽で…」

「やめうー！」

トーンは耳をふさいだ。その手をウインドが力ずくで引きはがす。

「逃げるな、自分の選んだ道を行くというなら、正直に真っ直ぐ真
実を見つめろ！

いいか、君がリードに味方するといつなら、これだけは忘れるな。
君が愛した女性が何を愛していたか。

君が奏てるそれにどんな思いを感じ、どんな思いを託していたか。
知らないかも知れないが、彼女は

「

目の前にいるはずもない人物を捉えて、ウインドは口をつぐんだ。
ミンスは何かに気付いて目を見張り、ビーナが慌てて銃を構える。
トーンが振り向くと、そこにはリードの姿があった。

「約束通り、迎えに来たよ

まるでトーン以外は見えていないかのよう」、リードはひそひそと笑みを浮かべた。

ウイングがつかんでいた手を離し、自由になつたトーンはゆっくりとリードの元へ近づいた。

右手に何かを握っているのが見えたが、そんなことは全く気にならなかつた。

トーンに当たつてしまつたのを恐れ、ビーナは引き金を引けないでいる。

「いいんだね？」

トーンは静かに頷いた。

リードが草笛を引くと、穏やかだった周囲に徐々に風が吹き始めた。

ウイングの表情には先ほどビーナを見ていた時と同じ感情が浮かんでいるように見えたが、

それが何を意味するのかは、トーンにはわからなかつた。

風が紙ぐずや落ち葉を巻き添えにして大きく舞い上がる。

次の瞬間にはもう三人の姿は景色から消え、代わりに緑の生い茂る大地が広がっていた。

第六章・音楽の力

第六章 音楽の力

トーンが立っていたのは、これまで見たこともないような自然の命溢れる世界だった。あちこちに生え伸びた太い木々のざわめきは楽しく歌っているかのように聞こえ、やむことのない動物たちの鳴き声は、新しい仲間を歓迎するパレードのように感じられた。

一步踏み込んだときに小枝を踏んだ音で我に返り、トーンは辺りを見回した。

「僕ならここちだ」

声のした方に振り返ると、そこに変わらない笑顔を浮かべたリードの姿があった。

「気に入つてもらえたかな。森にいるみんなも、君を歓迎してる」

「リードは？」

トーンはぐるりと見渡しながら言った。

「名もない森さ。メトラの南側にあつた山を越えた先に存在する、唯一誰の手にも犯されていない、僕と君の二人だけが知っている特別な森だ」

トーンは胸一杯に空気を吸い込んだ。

これまで行ったどこよりもおいしく感じられる。

立っているだけで全身が空気に包まれているのが分かつた。

「オカリナを吹いたら、一体どんな音がするんだろう。」

「オカリナで奏でる音楽は、すこし澄み切った音がするんだ」

トーンの心を読んだかのよつてロードは言った。

「もしよかつたら聞かせてくれないかな。

君の音楽を。

森の動物たちも待ち望んでいるはずだ。

それに、澄んだ空氣の中で奏でる音楽がどれだけ美しい旋律を生むか、

一度味わっておくのも悪くないと思つ」

断る理由はなかつた。

トーンはポケットからオカリナを取り出すと、

一、二度深呼吸をして緊張に強ばる体をほぐし、

ゆっくりと丁寧に、一音一音確かめるように音を紡いでいった。

全身に震えが走った。本当に自分の音かと疑つてしまつほひ、オカリナから美しい旋律が鳴り響いていた。

指が震えるのがわかる。

それは驚きでもあり、

感動でもあり、

恍惚でもあつた。

ずっと憧れ、ずっと愛し続けたビオラの音楽のようだつた。

二人を囲むようにたくさん動物が集まつてくる。

初めは何が起つるのかと不安になつたが、

すぐに彼らもただ音楽を聴きに集まつてきたのだとわかつた。

演奏を終えると同時に、リードが大きな拍手を送つた。

「どうだつた？」

全く違つ世界が、目の前に広がつたでしょ。

それが、本当の音楽の世界なんだ。

どんな生き物の心も魅入らせる力がある。

よどみがなく、全てが美しく輝き、多彩で心地よい音を放つ世界。僕たちはこれから、その美しい世界を取り返しに行く

そうだつた、ヒトーンは現実に引き戻された。

そのときはつと、リードの手に握られていたものを思い出した。

「コルペットで事件が起つていて聞いたけど……」

「うん。鍵はもう手に入れたからね」

そう言つて、リードはおもむろに右手を挙げて持つていていた鍵をぶら下げて見せた。

トーンの心配そうな表情に気付いて、優しい口調で言つた。

「大丈夫だよ。

ちよつと予想していたより手間取つたけど、僕はこうしてぴんぴんしてる。

君の力を借りたいのは次の町だ」

トーンが口を開けいつとあるのを手で制し、リーダは続けた。

「その前に、まずは僕たちの部屋に案内してあげるよ」

自分の背丈と同じくらい長い茂みをかき分けながらリードの後に
ついていくと、

茂みがきれいな境界線を引くようにして突然途切れ、大きな広間に
でた。

空に突き刺さっているかのように見える長い木の枝が、
お互いの手を取り合ひように伸びてその空間にドーム型の屋根を作
つていた。

無数の葉の隙間から太陽の光が差しこみ、緑の温もりが心地よい空
間を作り出している。

その中心には丁度良い高さの一いつの切り株と、
折れた幹や枝を集めて作られたであろう粗末な小屋があつた。

小屋の中は、当然といえば当然なのかも知れないが何も置かれて
いなかつた。

唯一の飾りといえば壁に刺さつた釘と、そこにぶら下げられた四つ
の鍵だけだつた。

「それが、この前に話した鍵さ。

右から、コントラス、シターン、バンジョー、コルペットの鍵。
手に入れた順番で並べてあるんだ。

その後ろに、ミルリトンの鍵が加わる予定だよ」

「ミルリトン?」

トーンは思わず聞き返してしまつた。

ミルリトンといえば、ダイヤグラム大陸で最も大きな町だと言われ

ている。

規模が大きい分、警備も半端な数ではすまないだろう。
それに鍵を狙っていることが知れてしまつて、
鍵を保管している場所は特に相当の護衛がつけられるに違ひなかつた。

「なんていうか、方法……といつか、作戦みたいなものはあるんだよね」

トーンは不安になる気持ちを抑えることができなかつた。

「 もううん」

リードは「うう」と笑顔を浮かべて答えた。

「ミルリーンの中心部に、太陽の塔といふそれは高い塔があるんだ。
そこで、君に音楽を奏でてもらいたい。
わざのよひと、君のオカリナで」

返す言葉が見当たらず、トーンはその場で頭をぱちくつさせた。
言葉の意味を理解するまで時間がかかり、
それを頭の中で整理するのにさらに時間がかかつた。

「……音楽を弾くだけ？」

リードは「くつと頷いた。

「でも、わざと不快な音を出したり、変に気負つて演奏してはだめだ。

さつき聞かせてくれたよひと、普段と同じよひと楽しんで演奏し

てくれればいい。

美しく透き通った音楽は、どこまでも遠くへ広がっていくものだから

から

完全に納得はできなかつたが、トーンはリードの言葉を信じるにとした。

なにより、そのためにはリードの元へ来たのだから。

「決行は明日だ。

それまではゆっくり休んでもらつて構わないよ。

今、食べ物を持つてくるから」

やう言つて、リードは呑み下し小屋を出て行つた。

一人になつた空間を、トーンは何度も見渡してみた。

糸のよくなもので縛られた細めの幹や枝の束が無造作に積まれてできた壁に、

乾燥した様々な茎が組み合わされてできた屋根。

扉はなく、外からの風が否応なく小屋の中に入つてくれる。

それでも、何不自由なく過ぐじてこべことができるだらつと、トーンは思つていた。

不思議だつた。

決められた手順に沿つて決められた方法で建てられた家に当たり前のように住み、

暑いときは外にでて川や湖などの涼しいところで遊び、

寒いときは家中にこもつてたき火を囲んで過ごしたものだ。

しかしここでは、ほぼ外界と同じ空間の中にも関わらず、暑くもなく、寒くもなかつた。

あちこちに生え育つた緑が暑さや寒さを和らいでくれ、

生き物が過ごしやすい環境を作り出してくれている。

空気は澄み切つていておいしく、心なしか体も軽く感じられた。

ずっと昔の人は、こういう環境の中で長い間多少の苦はあったもの、

何不自由なく暮らしていたのだろう。

それなのに何故、人々は環境を悪化させてまで今のような暮らしを選んだのだろうか。

この方がずっとずっと、暮らしがやすいだろうに……

物音が聞こえ、トーンはびくっと小屋の入り口を見た。
りんごが一つ、ころころと転がってくる……と、

その後に続くように両腕に色々とついたりの果実や野菜を抱えたリードが入ってきた。

二人で食べるには多すぎると思ったが、小屋の外を見て納得がいった。

そうだ。この森にいるのは、一人だけではないんだ。

次の日の朝頃、トーンは一人ミルトンの町の中を歩いていた。
太陽の塔を見たことがなかつたため無事たどり着けるか不安だったが、

何も心配はいらなかつた。

到着してすぐに、一本だけ突き出た長く太い塔が、

見つけてくれといわんばかりにそびえ立っていたのだから。

塔のちょうど中心あたりに、

太陽のモニメントのようなものが取り付けられていた。

子供が絵に描くような、

オレンジ色の丸に沿うようにして三角の花が何枚も並べられたその

姿は、

一概にも太陽と呼べるものではなかつたが、
太陽の塔だと認識させるには十分だなものだった。

塔の入り口には、訪れる多くの人ばかりでごつた返していた。
人の間を縫つて中へ入ると、ガラスケースが壁に沿つようにして置
かれ、

太陽や月にまつわる書物や過去の遺産らしいものが飾られていた。
上にはどうやっていけばいいのだろうかと辺りを見回してみると、
すぐ近くにらせんの階段を見つけた。

トーンは目を見張つた。

まさか、階段が勝手に動いているなんて！

「おい、いきなり止まるな！」

後ろで人がつかえていることに気付いて慌てて動く階段に乗り込
んだが、

トーンは不安でいっぱいのまま下へと流れしていく風景を眺めていた。

春の太陽、夏の太陽……季節毎の太陽の景色が、
階段の動きに沿うようにして壁に描かれていた。

春は青々とした木々や満開の桜を遠くから見守る親のように、
夏は海水浴で賑わう海や森の中でキャンプをする人々と楽しく笑う
友達のように、

また秋も冬も、太陽は季節毎に違つた表情で描かれていた。
それでも太陽は違つ形にはならず、ずっと同じ姿のままだった。

動く階段を降りた後、トーンは邪魔にならないよう隅に移動して
から、

再び辺りを見回してみた。

右側には地上へ続く絵画や美術品などが並ぶ道がのびている。

正面には先ほど乗ってきた一方通行の動く階段があり、

左側にはトイレと、「関係者以外立ち入り禁止」と書かれた扉があつた。

その扉こそ、頂上へと続く道であるはずだった。

トーンは正面の壁に掛けられた時計を見た。

日が暮れるまでにはまだ多少時間がある。

閉館の時間頃にトイレに駆け込み、三つ目の個室トイレにある天井の換気扇に入る。

手順は頭の中に入っている。

それで、立ち入り禁止の扉の先に忍び込めるはずだった。

突然何かに指を握られて、トーンは心臓が爆発するかと思うほどびっくりした。

見ると、指を握っていたのはまだ幼い子供の小さな手だった。

母親らしき女性がすみませんと頭を下げて、

子供を連れて父親らしき男性の元へと戻っていく。

三人とも幸せそうに展示物を眺めていた。

一体どういうものが飾られているのだろうか……。

メトラでは、昔はよく演奏会が開かれていたが、

何かを飾つたり並べたりして楽しむといったようなことはしたことがなかつた。

もう一度時計を見る。ちょっとくらいなら、見て歩いても構わないだろう。

最初に飾られていたのは、

無限に広がるかのような草原の空に大きく描かれた太陽の絵だった。

その隣には、絵の説明である「う文章が書きつづられている。

『太陽は決してその美しき姿を変えることなく、

その下に生きるものたち全てに光という生命を送り続けている。草木は枯れることなくすくすくと成長し、

やがて実りの時を迎えて太陽の下を去っていくが、再び種となつて舞い戻つてくるものもいる。

しかし太陽は嫌な顔一つせずそれを受け入れ、光を与えてくれる。

これほど大きな存在を前にして、

人間とはどれだけ小さな存在であるかを、ひどく時間させる作品である』

太陽は、機械に同じように生命を与えていたのだろうか。トーンは思った。

大陸の姿を変え、人の心を変え、空気の調律までも変えて全てを壊そうとする、全く正反対な存在である機械でも、太陽は嫌がらずに受け入れるのだろうか。

それによつて例え、多くの人が苦しむことにならうとも……。

トンは他のものも見て回つた。

ねじを回すと奇妙に動き出す太陽の模型や、太陽の形を模して作られたランプのようなものが置かれている中、ある一つの写真にトーンは目を見張つた。

それは、怒り狂うように燃えさかる炎をまとつた太陽の絵だった。全てのものを飲み込み、溶かしてしまった。それは、さつきまでのよくな慈しみに溢れた姿とは到底かけ離れたものだつ

た。

トーンにはそれが、機械に対する、いや機械を使用するすべての者に対する太陽の答えのように思えた。

そのとき突然塔内に音楽が流れ始め、どこからか声が聞こえてきた。時計の針がもうすぐ塔が閉館になることを告げており、

周りの様子をうかがいながらトイレへと向かっていった。

トイレに入つてからは、何か緊迫めいたものがあるのだばかり思っていたがなんてことはなく、簡単にことは進んでいった。

ランプに灯をともし、どこへつながつてもわからない階段を上つていく。

やがて大きな扉に突き当たり、トーンはゆっくりとドアノブを回した。

がちゃりといつ音がして、扉の隙間から夜の月明かりが差し込んできた。

扉を抜けると、そこにはミルリトンの広大な景色が広がっていた。建物の明かりや忙しなく移動する車のライトが町を色づけ、ところどころで様々な色の明かりが不規則に点灯している。機械警察支部はどこにあるのだろうかと探してみたが、暗くて建物の区別が全くかず、すぐに断念した。

ミンスやウイングモ、この町に来ているのだろうか。

頭上に巨大な鐘が吊されているのが見える。

トーンはオカリナを取り出し、じつと眺めながらコードの言葉を思い出した。

「頂上にある鐘は、夜の十一時を回ると鳴る仕組みになつてゐる。鐘が鳴ると同時に、オカリナを吹いてくれればいい。鳴り終わるまで、ずっとだ」

同時に、この町も戦火に包まれることになるのだろうか？

そう思った矢先、トーンの耳元で鐘の音が大きく鳴り響いた。しかし思つたよりも衝撃がなく、すぐに音が鐘からではなく、どこから流されているものだと気付いた。

時間だ。

トーンは大きく深呼吸して強ばつた体をほぐし、ゆっくりとオカリナを吹き始めた。

やはり森で吹いたときほど透き通つた音はでなかつたが、目を閉じてただひたすら吹き続けた。

聞こえていた町の喧噪はどこかへ消え、自分の奏でる音楽と鐘の音だけが聞こえていた。

鐘の音が止んだことに気が付き、トーンはオカリナを吹くのを止めた。

最悪の景色を想像してゆっくりと田を開く……しかしその田に飛び込んできたのは、コントラスのような惨状ではなく、何も変わらない、つこをつき見たものと全く同じ景色だった。待っていても、何も起こりそうにない。

失敗したのだろうか。

ふと、町に灯された明かりが全くに変化していないことに気付いた。

もしかしたら 体が震えるのがわかつた。

音楽だけでも人を苦しめ、死に迫いやることができるはずじやないか。

顔からさあつと血の気が引いていく。

いてもたつてもいられなくなり、トーンは駆け足で来た道を戻つていつた。

塔の外に広がる光景を見て、
トーンは目を大きく見開いた。

塔一帯に、恐らくミルリトンに住む全ての人ではないかと思つほ
どの

もの凄い数の人が集まっていた。

何か知られてしまったかと思わず構えたが、

人々は何が起こっているのか、

どうしてこんなところにいるのかさえも分からぬ様子で、
きょろきょろといぶかしげに辺りを見回しながら方々へ散つていっ
た。

トーンも彼らと同じだった。

何が起こったのかわからないままだつた。

果たして鍵を手に入れることができたのだろうか。

その答えを知つているのはたつた一人しかいない。

トーンは足早に、リードが待つてゐるはずのあの小屋まで戻つてい
つた。

「おかえり」

リードは片方の切り株に座り、

周りに散りばめられた果実の一つを頬張っていた。

手招きして向かいにある切り株に座るよう促しているのが見える。

「空からの眺めがどうだったか、聞かせてほしいな」

まるで旅から戻ってきた友達を迎えるような口調に自分が遊ばれていたのではないかと思い、

トーンは憤りを覚えずにはいられなかつた。

もしかしたら、鍵を手に入れられなかつたことを隠そつとしているのかも知れない……。

トーンはだんだんいらいらしてくる気持ちを何とか抑え、切り株に座つてリードを真剣な眼差しで見つめ返した。

「鍵は、手に入つたんだよね」

少し皮肉っぽい言い方になりしまつたとも思つたが、別に弁解するつもりもなかつた。

実際にそう思つていたのだから。

リードはきょとんとした顔で何度もまばたきをした後、再び笑顔に戻つて口を開いた。

「もちろんだよ

「やつぱり……つい、何だつて？」

思いがけない返事に、トーンは思わず聞き返してしまつた。

「ちやんと手に入れたよ。ほら、ここ……」

そうこうで、リードはポケットから「ノルマ」と何かを取り出し、トーンの手のひらに乗せてみせた。

小屋の中で見た鍵と全く同じ鍵がそこにはあった。

「え、でもどうして……？」

トーンはまたもや頭が混乱してきた。
「町は全然壊されてなかつたし、
ずっと塔の天辺にいたけど、
騒動らしい騒動なんて一度も……」

「見るはずなんてなこと。今回は、町を遅う必要なんてなかつたんだから」

「どうこいつ」と…

トーンは回りくどい言ひ方に少しいらいらしながら聞いた。

「塔の外に出たとき、たくさんの人だかりができていただろ?」

トーンは頷いた。

「ここに来て初めて君に演奏してもらったとき、僕がなんていったか覚えてる?」

「確か……美しい世界を奪い返しに行く……とか」

トーンは天をあおぎながら必死に記憶をたどつてこつた。

「違う世界がどうとか……心を魅入られるとか」

「やべ、 それだ」

『答と言わんばかりに、 リードが声を上げていった。

「本当の音楽は、 全ての生き物の心を魅入らせる力がある。 それは人間も同じよ」

「つまり塔の周りに人が集まっていたのは、 僕の奏でた音楽に魅入られてきたと？」

リードが満面の笑みを浮かべる。

しかしそんなはずはないと、 テーンは思つたことを口にした。

「でも本当の音楽は、 澄み切つた空氣の中でしか奏でられないんじや……」

「それが、 君の力なんじゃないか」

初めて聞いた真面目な口調に、 テーンは一瞬圧倒されてしまった。リードの表情から一つのまにか笑みが消え、 真剣な眼差しで言葉を継いだ。

「気付いていないと思つけど、 シターンでも同じような光景を見たはずだ。

僕だつて驚いたよ。

全然音はにじつていて、 きれいじゃなかつたのさ。

それでも、 君の奏てるオカリナの音楽に心を魅了する力があるのは

まぎれもない事実だつた。

塔の周りに集まつたたくさんの人だからが、いい証拠じゃないか」

トーンは何だか恥ずかしくなつて、向けられる視線を避けるようにうつむいた。

自分にそんな力があるなんてこれまで一度も考えたことがなかつた。いや、きっと自分だけの力じゃない。

ビオラのオカリナがあつたから、ビオラが側にいてくれたからこそ、奏でることができたんだ。

でもまよ……とトーンは思った。

それが鍵と何の関係があるんだ？

先に口を開いたのは、リードの方だった。

「鍵は、ミルリトンの守備兵の一人が持つていたんだ。

在処を特定しづらくしたかったんだろうけど、僕には好都合だった。

リラを保管する鍵は特別でね。

音楽に反応して人には聞こえないくらいの小さな音を出すようになつているんだ」

リードはそこで一息ついて手に入れた鍵をじつと見つめ、ゆつくりと口を開いた。

「君がいなかつたら、きっと僕は今この鍵を手にしてはいなかつたと思う。

あれだけ大きな町に音楽を響き渡らせることはできなかつただろうし、

そもそも人を呼び寄せる力なんてない。

力ずくでやるつとしていれば、守備兵に捕まつて今頃処刑された
いたかも知れない。

ありがと。本当に感謝してるよ」

「別に、リードの言つとおりにオカリナを吹いただけ。
鍵、並べてくるよ」

その場にいるのも恥ずかしくなつてきたトーンは、
リードから鍵を受け取ると逃げるよつと小屋へと駆けていった。

四つの鍵がかかつてゐる後ろに釘を差し込み、
一人で手に入れた五つ目の鍵をかけた。
あと一つで、ビオラを生き返らせることができた。
今では本当にそう思えるようになつていて。
トーンははやる気持ちを抑えながら足早に戻り、
食べかけの果実を手に取りながらいつた。

「次はどこの中に行くの？」

今度も同じよつに、オカリナを吹けばいいのかい？」

しかし、リードの答えは全く思いも寄らない方向へと進んでいつ
た。

「最後の鍵は、実はもうここにあるんだ」

トーンは田をぱちくつさせたが、
すぐに鍵が保管されてゐる町のことを思いだし、
田を輝かせた。

「やつぱり、メトラに保管されていた鍵はリードが持つていたんだ！」

だから 「

リードが首を横に振るのを見て、トーンは言葉を呑み込んだ。
他になにかあつただろうかと思考を巡らしてみたが、
思い当たることは何一つない。

「じゃあ六つの鍵つて一体どーし……」

リードの返答に、トーンは言葉を失った。

「君の持っている、そのオカリナの中だ」

一瞬、何をいっているかわからなかつた。

ビオラがくれたオカリナの中に、最後の鍵が入つているというのだ。

オカリナを取り出して耳元で振つてみると、

何かが入っている様子など微塵も感じられない。

穴から中をのぞいてみると暗くて何も見えず、

太陽の光に当ててもう一度見てみると、結果は変わらなかつた。

リードが口を開いた。

「恐らく中で固定されているんだろう。

だから、君も気付かなかつたんだと思ひ

全く信じられないという表情で、トーンはリードを見た。

そもそもなんでそんなことを知つているのかわからない。

オカリナをまんべんなく調べてみたが、

鍵を入れた形跡などどこにも見当たらなかつた。

リードの言葉が本当だとすると、始めから入つていたということがなる。

だがビオラは鍵のことなど、何もいっていなかつたはずだ。

トーンは疑いの眼差しをリードに向けていった。

「この中に鍵が入つてゐるなんて、ビオラしてわかるんだよ」

「知つているからさ。

そのオカリナを。

君がビオラからもらつたものだつてことも」

トーンは目を大きく見開いた。

なんでビオラのことを そこではつと、リードの家で見た写真のことを見出しだ。

なぜこんな大事なことを忘れていたのだらうか。いや、信じようとしていなかつたのだ。

リードがビオラの兄であるといつ事實を。

リードは思い出を懐かしむよつた表情で空を見上げた。

「そのオカリナは、母さんが作つたものなんだ。

僕の持つてゐる楽器もそう。

母さんは樂器を作るのが大好きだつた。

その方が自分の好きな音を作り出せるからつて。

たくさんの中の樂器を作つては、大きな樂器は僕が、小さな樂器はビオラがもらつて、二人で弾いて聞かせてあげた。ビオラは中でも特にオカリナの音を好んで、

母さんに教えてもらひながら自分でもオカリナを作つたんだ」

トーンは壊れてしまつたオカリナを思い出して、胸が押しつぶされるような気分だつた。

「母さんの日記を見つけるまでは、

僕も鍵が入っているなんて知らなかつた。

でも気付いたときにはもう遅かつた。

まるで時を見計らつたかのように、ビオラの死を告げられたんだ」

最後の言葉に殺意のような感情が込められているのを感じ取り、さらにこそが自分へ向けられているように思えてトーンは無性に腹が立つた。

「ビオラを殺したのは僕じゃない！」

リードはこいつと笑つていつた。

「わかつてゐる。

君の音楽を聞いてはつきりしたよ。

一番信用している人に渡したつていうビオラの言葉がすぐに理解できた。

本当の音楽を奏でられる君なら、

機械に汚染されたダイヤグラム大陸を元の姿に戻すことができる。だから君に、オカリナを渡したんだ」

このオカリナを受け取ったときのことをトーンは思い出していた。

騒音から逃げるよう下流へと移動し、

ようやく辿り着いたところで、ビオラは倒れた。

部屋へ連れ戻した後、ビオラは震える手でこのオカリナを自分に渡して、死んでしまつた。

「「」のオカリナで、たくさんの人を幸せにしてあげてね」

それが、ビオラの最後の言葉だつた。

機械に苦しむ人々を救つてほしいと、
機械といつ存在に縛られた人々を救つてほしいと彼女は願い、
その思いを自分に託したのかもしれない。

トーンはそこであることを思い出し、慌ててリードに振り返つた。

「ちょっと待て。

そういえばリラつて、伝説の吟遊詩人にしか弾けなかつたはずじ
や……」

何かでそう読んだことがあつた。

それが本当なら、全ては水の泡だ。

しかしリードの返事を聞いて、トーンはさらに目を大きく見開いた。

「それは他人ならの話しだよ。

血が繋がつていれば、話しあ違つ

なんと、リードは伝説の吟遊詩人の子孫だといふのだ！

「僕にしかできない。

僕にならできるんだ。

リラを使って、この大陸を救うことができるのは

夢でも見ているんじゃないかと思つた。

信じられないようなことが次々と明らかになり、

伝説の吟遊詩人の生まれ変わりが目の前にいるなんてのだ。

リードの言葉が嘘だとは到底思えなかつた。

今さら何を疑うというのか。

例え嘘だつたとしても、どちらにしろもつ前に進むしかないところまで来ているのだ。

トーンはオカリナに視線を落とした。

何も迷うことはない。

思い切り振りかぶり、地面に力強くオカリナを叩きつけた。オカリナは粉々に砕け散り、中から一つの鍵が姿を現した。それは間違いなく、二人が探していた六つ目の鍵だつた。

トーンは全ての鍵を持ち、藁帽子を深くかぶつてパンの町を訪れた。

通りに人の姿はなく、嵐でも来るのではないかと思うほど静まりかえつている。

リラは機械警察省本部の地下に保管されているらしく、

リードは本部の警備を引きつけるといって先に行つてしまつた。しかし本当に大丈夫なのだろうかと、トーンは不安でならなかつた。相手も恐らくこっちが全ての鍵を手に入れていることぐらい気付いているだろう。

これまでのリードの行動、ミルリトンでの一件を考えれば、それ相応の対処を用意してくるはずだ。簡単に通してくれるとは思えなかつた。

トーンは大きく深呼吸した。

今は信じるしかない。

そう思つて足を踏み出したとき、突然背後から声がした。

「ちよつと頬、やけで止まりなさい」

誰かに見つかったり、捕まつたりすれば全てが台無しになつてしまつことくらい、承知していたはずだつた。
それなのにどうしてこんな道のど真ん中で物思いにふけつてなぞいたのか。

トーンは自分の愚かさを、少しでも氣を緩ませた自分を恨んだ。

「ゆづくつといづれを向いて」

声の調子からしてまだ氣付かれてはいないよつだつた。
さて、どうしたものか。

全速力で逃げるか？
いや、下手に目立つては逆にまずい。
トーンは言われた通りにした。
帽子のつば越しに守備兵の足の先がみえる。

「こんなところで何をしている。
外出禁止警告を聞いていなかつたのか？」

だから誰もいなかつたのか。
もしかしたら上手く言い逃れられるかも知れないと思い、
トーンはとつやこ思いついた嘘をまくし立てた。

「父が急病で倒れてしまつて、
急いで薬を取りに行かなくてはいけないんです。
母は自分が生まれる前に他界してしまつて、
父にまでいかれてしまつたら、

自分は一人でやつていけるかどうか……

トーンの言葉に守備兵は少しの間黙っていたが、やがて小さくため息をついていった。

「わかった。

急いでお父さんに薬を渡してやれ」

トーンは頭を深々と下げながら大きな声でお礼の言葉を述べ、逃げるようにその場を後にした。

人目のつかないところで足を止めると、

全身にどっと汗が噴き出した。

心臓の鼓動が聞こえる。

口で大きく息を吸い体に十分な空気を取り込んでから、顔を両手ではたいて心を落ち着かせた。もうあんな思いはまっぴらだ。

無事に本部までやつてきたトーンは、リードの底知れぬ力を実感せずにはいられなかつた。誰もいない裏門をぐぐり、

地下への入り口へと続くがらんとした黒いカーテンの上を歩いていく。

どこかに身を隠して様子をうかがつているのではないかと周囲に目を走らせてはいたが、

結局最後まで誰にも出会ひことはなかつた。

地面に隠れるようにして設置されていた扉に気付き、トーンは取り付けられている輪つかを引いて扉を開けた。冷たい風が中から吹き上がる。

地下へと続く階段がはつきりと見え、

中は思つていたよりもずっと明るそうだった。

側にあつた留め具で扉を固定して、トーンはゆっくりと階段を下りていった。

地下洞窟といつよりも、しつかり作り込まれた秘密基地みたいだとトーンは思つた。

鉄やコンクリートで作られた壁に、一定の間隔で天井に取り付けられた照明。

食料貯蔵庫や仮眠室のようなものまである。

しかし何より不気味なのは、温もりが全く感じられない空氣の冷たさだった。

寒いとかというのではなく、死という感覚が空間を漂つているような感じだった。

奥に行けば行くほど、その感覚は強くなつていった。

リラを見つけるまでにそれほど時間はかからなかつた。一本道をひたすら進んでいくと、やがて大きな広間に出了。中央には鉄格子の箱があり、四方の壁から伸びた鎖がその箱を何重にも縛り付けて宙に固定していた。

一步足を踏み入れたとき、

トーンは突然自分の体が内から朽ち果てていくような感覚に襲われた。

喉からこみ上げてくるものを何とか飲み込み、気持ちを落ち着かせる。

背中が汗でびっしょり濡れているのがわかる。

まるで死神が今にも自分の首をかつ切ろうとしているような恐ろしい感覚が全身を包み込んでいた。

これ以上足を踏み入れてはいけない。

全身の細胞がそう訴えているような気がした。

しかし次に足を踏み出した時には、もう何も感じられなかつた。

トーンの興味はすぐに目の前の箱に向けられた。

一歩近づく度に心臓が大きく脈打つのがわかる。
箱はもう田と鼻の先だつた。全身に震えが走る。

本でしか見ることの叶わなかつたリラが、今日の前に置かれていた。

鎖をつなげるよつに取り付けられた錠前を手に入れた鍵を使って外していくながら、

トーンはリードのことを考えていた。

今どこにいるのだろうか。

捕まつてはいられないだろうか。

思えば、全てがリードのおかげだつた。

眞実を教えてくれ、進むべき道へと導いてくれた。

リードがいなければ、今頃自分はどうなつていただろうか。
乱れていく空氣の中、何も知らないまま死んでいたかもしれない。
感謝してもしきれないくらい世話になつた。

無事リラを取り返して、ビオラを生き返らせることができたとして、
自分は一体何をリードに返してあげることができるだろうか……。

思わず手をすべらせてしまい、

最後の錠前が甲高い音を立てて入り口の方に転がつてしまつた。
慌てて振り返り、入り口の先に人影を捉えて思わず息を呑んだが、
それがリードだとわかつてほつと胸をなで下ろし、

自由になつた箱に視線を戻した。

リード？

トーンが再び慌てて振り返ると、リードが笑顔でそれに答えた。
しかしそれが作り笑いであることは見て明らかだった。
服があちこちで裂け、血がにじんでいる。

顔色が悪く、今にも倒れてしまいそうだ。

近づこうと一步踏み出しだが、

不意にリードの背後に現れた一人の見慣れた姿が視界に入り、
トーンはその場に凍り付いた。

「トーン、君の負けだ」

何故ウイングがここにいるんだ？ それに一体何をいつて……。

「地上で何十という守備兵が待機している。

リラを手に入れたところでもうどうしようもない。諦めるんだ

トーンは愕然とした。

逃げ道は断たれてしまった。

せっかくここまできたといふのに、リラがもう目の前にあるといふのに、

何もできないまま終わってしまうのだろうか。

だがリードは違つた。

リードの目は傷ついてひどく弱つているように見えたが、
そこには諦めの色など微塵も感じられなかつた。

やつてみなければわからない。

何となくそういうわれているような気がして、トーンにも力が湧いてきた。

「コラを……」

コードの葉に、トーンは急いで箱の中からコラを取り出した。

しかし渡しに向かおうと踏み出した足は、
ウイングの怒号によって再び押し止められてしまつ。

「トーン、君は今何をしようとしているのか、本当にわかっているのか?」「

コラを両手に抱えたまま、トーンはまつりとウイングを見つめ
返した。

「機械のなかつた大陸を取り戻そうとしているんだ」

ウイングは間髪入れずに答えた。

「君が取り戻そうとしているのは、ビオラだけじゃないのか?」「

トーンはぎょっとして、思わず視線を逸らしてしまった。

ウイングはたたみかけるよつていつた。

「機械をなくすところなら、どうやってその機械をなくすつもりだ。
まさか霧のように消えていくわけではあるまい。」

君は少しでも、その方法を考えたことがあったか？
リラを使ってどうやって機械を消していくのかを

いわれてみれば、一度も考えたことがなかったよつた気がする。

いや、方法などどうでもよかつたのだ。

『なくなる』ということだけで満足していた。

ビオラのことだって同じだ。

『生き返る』ことなどナカで満足して、ざつやつと生き返らせる
のかは聞いていない。

その答えを求めるよつて、トーンはリードに振り返った。

しかしリードはこつものよつて、笑顔を浮かべただけだった。

ワインドはあざむけられよつていた。

「リードは答えてくれたか？」

答えてはくれまい。

リラが破壊の楽器などといふのはすがないからな

破壊の……なんだつて？

トーンはリードを見て、ワインドを見て、再びリードを見た。

リードが苦しそうに口を開いた。

「君を止めるための、単なるまかせを」

リラを持つ手に力が入る。

リードのこつとおりだ。

この楽器は呪われたこの大陸を復活させた大陸ではなかつたか。

トーンがウイングを睨み付ける。

「あなたは、吟遊詩人の誇りをなくしてしまったんですか？」

「君は何もわかつていない」

ウイングは表情こそ落ち着いていたが、その声はどこか焦つているよくな、

何かを恐れてこよに怯え感じられた。

「なぜオカリナを壊したんだ。一体なぜ！」

彼女は音楽を愛していたんじゃないのか？

それなのにどうして、それを壊すようなことをしたんだ！」

ウイングの思いがけない言葉に、トーンは呆然と立ちつくすしかなかつた。

言葉の意味が理解できなかつた。

オカリナを壊したこと後に悔などしていない。

心は痛んだが、リラを手に入れるためにはどうしてもやうしなければならなかつたし、
ビオラだつて……。

トーンはなぜか突然、いいしれない胸騒ぎを感じた。

ビオラは何といつていた？

『「Jのオカリナで、みんなを幸せにしてほしい』』

トーンはずっと、オカリナに入っている鍵のことをこいつてこのの
だと思っていた。

だが『このオカリナ』が意味するものが果たして、
鍵ではなくオカリナそのものだったとしたら?
ウインドはそういうのではないか?

トーンは首を横に振った。
しかしそれではつじつまが合わない。
何も救えないじゃないか。
ビオラも、母も、この生まれ育った大陸も全て、機械に汚染された
ままだ。

まじわされるな!

トーンは心の中で自分自身に怒鳴った。
ビオラが機械によって殺されたことを忘れてしまったとでもこいつの
か。

もう悩まない。

悩むことが、全てに対する侮辱だと悟った。

不可解な点はたくさんあった。

だが一つ確かなのは、機械のある世界に希望はない。
といつことだつた。

不安げに見つめるリードに微笑み、次にウインドを見た。

その目には、怒りの炎ではなく、決意に満ちた炎が宿っていた。

「僕は希望のある世界を選ぶ」

リードまでの距離は、ウインドからよりも近いはずだった。

トーンが走り出すと同時に、ウインドも走り出す。

腕を伸ばしてリードにリラを渡し、その勢いのままウインドに体当たりして、

鉄の床を転がつていった。立ち上がりうとする背後で、リードの声が聞こえてきた。

「 もう戻れないよ、ウインド」

トーンには、その言葉が自分にも向けられていたよつな飯^{ミク}がしていた。

ウインドが叫ぶ。

リードがそれを無視して、ゆっくりと震える指でリラを奏で始めた。今にも倒れそうだった体はみるみるうちに生き生きを取り戻していく。

柔らかく真っ直ぐな音楽が響き渡る と、突然大きな震動と地鳴りがしたかと思うと、あちこちの鉄の床が盛り上がり始めた。

「トーン、急いでこっちにくるんだ！ そこには危険だ！」

ウインドの声が聞こえたが、トーンはそれどころではなかつた。震動は徐々にその大きさを増していく。今ではまともに立つていられないほどになつてゐる。バランスを保つのだけで精一杯だつた。足下の床が盛り上がつた反動で足を滑らせ、思い切り尻餅をついてしまう。

次の瞬間、目の前の床を突き破つて一本の太い幹が顔をのぞかせたかと思つと、

もの凄い勢いで生え伸びて天井を突き破つていった。

盛り上がりでいた床のあちこちで同じように大小の幹が床と天井をつなぐ柱のように伸びていく。

それだけじゃない。

幹のあちこちから幾重もの蔓が生えだし、壁を這いつゝ一元のみよし道に

気に伸び始めた。

トーンは慌ててウィンドの元に駆け寄り、ウィンドは風の音に全神経を集中させて、

次から次へと襲つてくる幹や蔓を避けていった。

リードの背後の床がひときわ大きく盛り上がったのを見てトーンは叫んだが、

リラを演奏する指以外ぴくとも動こうとしない。

力ずくで助け出そうと踏み出したが遅く、

何千年と生きたかのようながつしりとした幹が瓦礫を舞い上げながら姿を現し、

爆発したかのような轟音を響かせて天井を突き破つていった。

瓦礫や土や埃などいろんなものが降り注ぐのを、トーンは通路から眺めていた。

いつのまにか音楽は聞こえなくなっていた。

押しつぶされてしまったのだろうか……しかし確かめようにも、

広間に蔓延した砂埃のせいで全く何も見えなかつた。

徐々に砂埃が薄れしていく。

人の形をした影を捉え、トーンは胸が高なるのを感じた。

「リード

」

降り注いだ瓦礫や土がまるでリードを避けるように地面に散らば

つている気付く、

トーンは息を呑んだ。

リードには傷一つない。

そう、本当に傷一つついていないのだ。
先ほどまであつたはずの無数の切り傷は嘘のよつこびにかく消えて
しまっていた。

リードがトーンに微笑みかける。

「いつたろう、リラには元に戻す力があるってや。君がリラを渡してくれなかつたら危ないとこりだつたけど。それにまぢ……」

いいながら、リードは後ろを振り返った。

「君の願いも、叶えることができた」

トーンはまつとして辺りを見回した。
しかし目に入るのは壁にからみつくように伸びた蔓やたくさんの幹
だけで、

それらしきものはどこにも見当たらぬ。
ふと、リードの視線の先にある幹の形が、他のとは異なり何かを象
つていてるようになに見えた。

天辺に刻まれた複数のしなやかな線は髪の毛のように見え、
一つの橢円は目のように見える。
まるで女性の上半身だけが幹から生まれてきたかのよ

「肉体はもう朽ち果ててしまったから、
せめてビオラの好きだった自然の一部に、
魂を呼び寄せたんだ。

話すことはできなくても、
君の声は聞こえているよ」

返す言葉もなかつた。たんたんと平氣で話すリードが信じられなかつた。

思い描いていたものとは全く違つ光景が目の前に広がつていた。
面と向かつて言いたいことがたくさんあつた。
大事な手作りのオカリナをくれたことに礼をいい、
それを壊してしまつたことを謝りたかつた。
これまでに過ぎていつた色々なことを話し、
今日までの武勇伝を伝えたかつた。

それなのに……トーンは、木になつたビオラを見上げた。
当たり前だが、表情には何も浮かんでいなかつた。
幹に近づき、まるで本物ようにしなやかに伸びたビオラの手に触れるおぞる触れてみた。

あたたかい。

血が通つてゐるかのように脈打つのが感じられる。
しかし、それが余計に切なさと孤独を感じさせた。

トーンはがくつと膝を落とした。
これが……これが答えるだとうのか……。

歩み出しからからぬコードの前に、すかむずウインドが立ちはだかる。

「行かせはしない」

リラから音が一つ漏れたかと思つと、
ウインドは突然横からしなるよつに飛んできた蔓に吹き飛ばされた。
リードは何にも田もくれず、蔓をのぼつて地上へと姿を消した。

ウインドは痛みにうめく体をこりえながらうなだれていのトーン
の元に歩み寄り、
髪をつかんで無理矢理顔を自分に向けさせた。

「自分で選択した道を悔やむんじゃない。
その行為がどれだけの人を侮辱することになるか、
よく考えるんだ」

トーンは木になりはてたビオラを見上げた。
目から涙のように樹脂が流れていることに気付く、
ビオラがいついていたという言葉を思い出した。

『オカリナは、一番信用している人に渡した』

なぜオルガは、オカリナに鍵を隠したのか。

なぜビオラは、実の兄ではなく自分にオカリナを渡したのか。

彼女たちは大陸の復活など望んではいなかつた。

ただ純粹に音楽を愛する心を持ち、音楽の美しさを理解し、
その音楽をみなに伝えてくれることを望んでいたのだ。
音楽で人を殺し、全てを破壊するなど、
全く望んではいなかつたのだ……。

トーンは自分の愚かさを呪い、ただその場に泣き崩れるしかなか
つた。

第七章・響き渡る音楽

第七章　響き渡る音楽

一夜もしないうちに、パンの町はまるで数百年の時を経たかのような、

緑のうつそうと生い茂る大地へと姿を変えた。

大陸をまるごと飲み込んでしまった植物は機械といふ機械に絡みつき、

建物や大地だけでなく人間をも貫いていき、あちこちのつるや木の枝の先に、

生々しい死体をぶらさげていた。

その様子を、トーンはビオラの木の傍でただ呆然と眺めていた。心にぽつかりと空いた空間は、もう決して埋められることはない。時折聞こえてくるリラの音は柔らかく包み込むように優しかったが、目の前に広がる光景は全く逆で、

まるで善といふ仮面をかぶった悪魔のたたやきのように感じられた。ウインドが隣にいてくれなければ、きっとどこか遠くへ逃げ出していただろう。

音楽が届かない場所へ、ビオラの存在を忘れられるほど、どこかずっと遠くの場所へ……。

太陽の位置は地下に入る前とほとんど変わっていなかつたが、ひどく長い時間が流れたように思えた。

ウインドはずっと遠くを眺めたまま、何かをのぞくよつて囁きを細めている。

トーンは重たい口を開いた。

「「じんなことになるとわかつていながら、
じつしてあのとき僕を止めようとしなかつたんですね」

あの時 リードの味方になるとこいつたあの日、
ワインドが全て教えてくれてさえいれば、
こんなことにはならずに済んだかもしけなかつた。

しかしそんな問い合わせ、ワインドにこいつてはただの言こと語に過ぎなかつた。

「止めなかつただと？ 私はいつたはずだ。
ビオラが何を考え、君に何を託したのかを忘れるなどな」

「僕にとつては、機械がなくなる」と、そが彼女の望む世界だと思つていました。

オカリナを預けてくれたのも、
リラを手に入れて大陸を昔の姿に戻して欲しいと願つていたんだ
と……

そこで一度言葉を切り、トーンは眼前に広がる惨状を見た。

「でも違つた。
気付いた時にはもう遅かつた。
リラがこんな楽器だつたとわかつていれば、
オカリナを壊してまで鍵を手に入れよつとは思わなかつたー。」

語気が荒くなる。

自分のいっていることが単なる責任転嫁でしかないことは、
トーンも十分承知していた。

だがそうでもしないと後悔や憎悪の念に体が押しつぶされてしまいそうだったのだ。

「君はまだわかつていない

トーンはぎょっとしてウイングを見た。

「彼女は君にただ、純粹に音楽を愛し続けて欲しかったからオカリナを渡したんだ。

機械がどうとか、リラがどうとか、

そんな余計なことは考えず、ただ純粹に「

ただ純粹に……いつしか、音楽のことなど考えていなかつた自分に気付いた。

ビオラを生き返らせることや大陸を元の姿に戻すことばかり考え、そもそもの発端である音楽に対して、何も考えていなかつたのだ。いや、忘れてしまつたのもshireない。

自分の欲求さえ満たされれば、それでよかつたのだと……。

再びウイングが口を開いた。

しかしその声には、これまでのような冷たい口調ではなかつた。

「リードに味方するといつた時、私は何か考えがあるのではないかと思つたんだ。

だから止めなかつた。

だから君のいうとおり、私に全く非がないとはいえない

ウイングはせつこつて立ち上がると、遠くの一点を真つ直ぐ睨み付けた。

「だからといって、ここで泣きべそをかいているつもりもない。
自分の過ちは自分で取り戻す」

ワインドは遠くを眺めているのではなかつた。
リードの向かつた先を見ているのだ。

力強い瞳を持つたワインドがうらやましかつた。
自分が犯してしまつた大罪を受け止めて先に進むことなど、トーン
にはできなかつた。

誰かに責められるのが恐かつた。
罰せられるのが恐かつたのだ。

それにこゝでビオラに謝り続けていれば、
いつか自分の罪が許されるような気がしていた。

そんなトーンの罪の意識を、ワインドの次の言葉が優しく包み込
んでいった。

「今回起こつてしまつたことは確かに君の責任だ。
だがこゝも考えられないか？」

君がやらなくとも、きっと誰かががやつていたかもしれない。
リードが君からオカリナを盗み、一人で全てを進めていたからも
しれない。

それにリードが事を起こさなければきっと私がやつていただろう
と、最近思うんだ。

少なくとも、君がいてくれたから、今でもミルリトンは無事なん
じやないか」

これからやつてくるであろう未来を考えれば、

そんなことが何の意味も持たないことだと思つていた。

だがウインドの言葉を聞いて気付いた。
ウインドは信じているんだ。

自分たちの勝利を。

まだ遅くないだろ？
リードを止めることができれば、ビオラは自分を許してくれるだろうか。

「最悪な事態を招いてしまったのは確かだ。

だがまだ結果は決まっていない。

罪を犯してしまったのなら、それを償わなければ」

トーンはウインドから向けられた視線を正面から見つめ、大きく頷いた。

後悔している暇はない。

やる」とはまだ残っているのだ。

ウインドが左耳に手を当てたのを見て、
トーンははつとして右耳に手を触れたが、
ZRCはどうかへなくなっていた。

だが気分が悪くなる様子はない。

リラの音楽が、本当に空氣の調律を直してくれたのかもしれなかつた。

しばらくして、遠くに一台の装甲車がこちらに向かってくるのが
見えた。

恐らくウインドがミンスを呼んだのだろうが、トーンは気持ちが落
ち着かなかつた。

他の人も、ウインドと同じように自分を迎えてくれるとは思えなかつたのだ。

車から降りてきたのは、ミンスとビーナの二人だけだった。

ビーナがトーンの見るなりその田に軽蔑の色を浮かべ、ミンスは見向きもしなかった。
予想通りの反応だった。

ミンスがウィンドに向かつて口を開いた。

「リードの居場所がわかつたのか？」

状況がひどく切迫したものだという事を容易に感じさせる口調だった。

よく見ると田の周りに何日も寝ていなかのよつなくまができるあがっていた。

ビーナはまだ元気そうだったが、疲れているのは田に見えて明らかだった。

「ああ、当然だ。それよりも……一人だけなのか？」

ミンスがあいでさした方向にトーンも視線を移すと、
リラのあつた地下に続く空洞から男がでてこようとしているのが見えた。

近づいてくるにつれてはっきりとしてくる輪郭にて、
トーンは自分の田を疑わずにいられず、胸が高鳴るのを抑えることもできなかつた。

「よう、元氣そうじやねえか」

トーンは男に勢いよく抱きついた。
まさか、生きていただなんて！

サンザは苦しそうに、でもどこか照れくさそうだった。

「痛え、痛えよ。まだ傷は治っちゃいねえんだから、もつと大事に扱ってくれ」

体を離し、小さい頃から何度も見てきた男の顔を、まじまじと確かめるように見つめた。

額の中心に豆粒でも入っているかのよつないほに、長さが揃えられた形のいいあごひげ。

紛れもない、サンザの顔だった。

「もうずっと会えないと思つてたのに……」

溢れてくる感情が邪魔してなかなか声にならなかつたが、小さい頃にもしてくれたように、サンザは全てをわかつていのうつな顔でにっこりと笑い、

トーンをぎゅっと抱きしめた。

温かくてちょっとにおう体は、トーンに甘いことを思つて出せば、冷たくなつた心を温めてくれるよつを感じた。

「そう簡単に死んでたまるか。
わしは君よりも頑丈なんだ。
それにトーン、お土産もあるんだ」

そういうてサンザが取り出したものを受け取つて、トーンは手を大きく見開いた。

手のひらに置かれたのは、なんと壊れたはずのオカリだつたのだ。
しかしよく見ると、模様や吹き口の形がちょっと違つていて、
表面にはまだわざわざがたくさん残つてこる。

「これ、どうして……」

サンザはビオラの木を指さしていった。

「あの立派な木が、お前に贈り物をしたいといつてきてな。今さつき急」しらえで作ったものだから形はいびつだが、十分満足のいく音がでるはずだ」

トーンは驚いてビオラの木を見つめた。

サンザが木の声を聞くことができるのは、ずっと前から知っている。だから何をいいたいのか、トーンにはすぐ理解できた。このオカリナはビオラの一部であり、そのものなのだ。

「さて、行くか」

一人のやうとつを眺めていたウインンドが口を開いた。

「どうやってリードを探すつもりですか？」

トーンの質問を予測していたのか、

ウインンドはあらかじめ考えておいたかのよつに答えた。

「心配ない。

大陸中に空高く舞う風が、私たちを彼の元へ導いてくれる」

行動を始めて間もない内に、

トーンはウインドのいつていた言葉の意味を理解することとなつた。リードが矢継ぎ早にミンスに行く道を指示している。

たまに窓を開けて風をあおぐよつに全身に風を浴びたかと思つと、

再びミンスに指示を投げている。

「ウィンドは風の音を聞いて、リードの向かった先を追っていたのだ。

「私はまだ、あなたを許したわけではありませんから」

隣に座っていたビーナが突然口を開いた。

「ウィンドさんがあなたを連れて行くといい、ミンス隊長がそれを承諾した。

「二人が何を考えているのかは分かりませんが、私はあなたと一緒にいるだけで嫌気がさします。もしおかしな行動をとれば、今度は引き金を引くのをためらったりはしません」

「当然の叱責だつた。

しかしだからといって、もうそれを恐れる気持ちはなかつた。

実際リードを止めるのも、

「ウィンドに付いていくことも正しことかどうかわからなかつたが、ビオラの流した涙を見て、

音楽によって壊されていく大好きだったはずのダイヤグラム大陸を見て、

このまま放つておくことだけは正しくないと感じていた。

「責任は取らなければいけない。

ビオラのためでも、誰かのためでもなく、自分自身のために。

トーンは外を眺めた。

まるで早送りされているかのように景色が後ろへ流れていぐ。
その遠くには、太く長い蔓が大地を切り裂く爪痕のよう、「まがま」
がしく残されていた。

車は一向に止まる気配を見せず、逆に速度を上げていく。
道に倒れていた細い木に乗り上げて激しい衝撃が車を襲つたが、
ミンスはそれをものともせずにアクセルを踏んだ。

外が徐々に見慣れた風景へと変わっていく。
しばらくして、トーンははつとした。

地面には緑の絨毯が敷かれ、
大陸を分断するかのように流れる川は今にもそのせせらぎが聞こえ
てくるように輝き、
あちこちにのびる木々には色とりどりの果実が実りの時期を迎えて
いる……。

「ああ、着いたぞ」

ミンスが川縁に車を止めた。

そこは、トーンが大切な人と一緒に何度もオカリナの練習をした、
メトラの川縁だった。

「なんでこんなところに……」

トーンは胸が押しつぶされるような思いだった。

ここには楽しい思い出以上に、悲しい思い出が詰まった場所だった。

「わざわざ送つてくれてすまないな。

トーン、わしは一足先にフルートさんのところに戻つているぞ」

サンザはそういって、一人町の方角へと歩き始めた。

トーンはウインドを見たが、ウインドは何も答えずにその逆の方角へ向かつて歩き始めた。

ミンスも、ビーナもその後に続く。

ビオラが頭の痛みを訴えて氣を失つた、あの川の下流へと向かつて……。

下り坂の最後の角を曲がると、その先には紛れもない、リードの姿があった。川の流れをずっと眺めたまま、近づいていくトーンたちに振り向くそぶりも見せない。

リードは川を眺めたまま口を開いた。

「待つてたよ。

すっかり元通りになつた空氣の調律が、役に立つたんじゃないかな？」

「ああ、十分なくらいだ。

おかげでこうやってお前を止めにくることができた」

リードはふふっと笑つてから、わびしそうな声で答えた。

「ウインドはすっかり変わってしまったね」

「変わってしまったのはお前だ。

あれほど音楽を愛していたお前は、もうビートもこなくなつてしまつた

「僕は何も変わらない。

変わったのは君たちの方だよ。

音楽を愛しているからこそ、それを壊した機械が許せないんじやないか。

ダイヤグラム大陸を復活をしてくれた恩も忘れて機械を作り出した。

苦しむ者の気持ちなど何も考えずに、こぞ自分たちが苦しめばそもそも音楽が悪者だとでもこいつように責め立てる。

元々の世界を壊したのは機械だ。

音楽の世界に無断で入りこみ、世界を壊していったのは機械を作り出した人間たちだ。

僕はただ、元の世界を取り戻そうとしているだけに過ぎない

リードが全員を睨み付ける。

そこには殺意さえ感じられた。

トーンはリードと目が合った瞬間、きつと睨み返した。

一瞬寂しそうな表情を浮かべたが、すぐに元の表情に戻っていた。

「貴様がしているのは、ただの殺戮じゃないか！」

ビーナが叫ぶ。

しかしリードは動じず、吐き捨てるようにいった。

「君たちの使う機械、が僕たちに与えた苦しみに比べれば、ずっとまさ」

今度はミンスが口を開いた。

「確かに、私たちは機械の利便性におじり、

人の苦しみや環境の変化に気付きもしないままそれに依存していった。

お前のおかげで、過ちに気付くことができた。

それには本当に感謝している。

だが全てを壊さずとも、お互いが共存して生きていく方法があるはずだと私は思う。

これまでの君の行動は、単なる傲慢に過ぎないと思つが？」

「機械なんてなくとも、人は十分に生きていいくことができる。彼がその身をもつて体験してゐるはずだ」

彼、という言葉にトーンは胸がつまるような思いだつた。
リードにとつては、もう自分は仲間ではなく敵なのだと、
はつきり突きつけられたような気分だつた。

「人間が機械を作つたんじゃない。

機械が人間に作らせたんだ。

樂になる、便利になるといつまじき声に、人間は利用され
ているんだよ。

一度染まつてしまえばもう忘れるることはできない。
今がまさにそうじやないか。

共存だつて？

笑わせないでよ。

今は仲間のような顔をしていても、すぐに裏切るのは目に見えて
る。

音楽があつても、樂には生きられないだらうからね」

三人とも、返す言葉が見つからなかつた。

誰も何もいわないのを見て、リードは話を続けた。
視線は、トーンに向けられていた。

「何が正しいか、これでわかつたんじゃない？」

物は考え方次第だよ。

音楽は人を殺してるんじゃない。

人を教導してるんだ。

実際彼女のいった通り、音楽があつたおかげで人々は身の危険に気付くことができた。

今回のことを見習にし、人々はこう思うはずだ。

機械は破滅を呼ぶ悪魔の化身だつてね」

「確かに、そうかもしれない……」

トーンは静かな口調でいった。
リードの視線を真っ正面で受け止めながら。

「でも、それでも、僕はビオラを信じることにしたんだ。
オカリナを君にじやなく、僕に渡したという事實を」

一瞬、リードがぴくりと反応したように見えた。

「ビオラがいつてた。

機械が大事な人がいれば、音楽が大事な人だつている。
大事なものを奪う事なんてできないから、
私は機械と音楽が共存できればいいと思つてゐるつて。
初めは単なる世迷い言だと思つてた。
でも今は違う。

彼女がオカリナを渡してくれたのも、

その可能性を見出しても欲しかったからなんだと思ってる。

今回のことと、大陸の人々もきっと一緒に探してくれるはずだ。
共存できる、誰もが幸せになれる方法を」

リードは鼻で笑い、あざけるようこつた。

「そりゃこいつたばかりじゃないか。

機械がある限り、人は欲望に負ける」

「それは以前のように何も知らなかつた場合だ。

今はみんなが、リードのおかげで機械の持つ危険性に気付いてる

少しの沈黙が辺りを包み込む。あのときと変わらない三のせせらぎだけが響いていた。

先に口を開いたのはリードだった。

「……わかつたよ」

それはこれまで聞いたどれ声よりも重く、悲しい響きだった。

「僕も、その限りなくばかげた考えに賭けてみることにする」

ウイングとミンスが信じられないというような表情を浮かべ、ビーナはいぶかしげな表情を浮かべたが、

トーンはそれを言葉通りに受け止め、表情が明るくなつた。

「それじゃあ……」

「うん。 もう何もしない

前に見たときと同じこいつとした笑顔が、リードの顔に浮かび上がっていた。

「一つだけ、お願いがあるんだけど……」

「なに?」

「リラを、預かっていてほしいんだ。

他の誰でもなく、トーン、君に」

そういつて、リードがリラを差し出した。

トーンは少しの間悩んでいたが、やがてゆっくりと歩み寄り、リラに手を伸ばした。

しかし次の瞬間、リードはトーンの腕を掴んで引き寄せ、ミンスとビーナがどささに取り出した銃の盾になるように構えた。リラの音に対抗できるようウインンドがホルンを取り出す。トーンは腕を取られ身動きができなかつた。

「一体何を

トーンの言葉をわざわざひいてリードはいった。

「わかつてない。
わかつてないんだよ!」

音楽さえあればみんな幸せだつたじゃないか。
好きな楽器を持ち寄つて、音楽を奏でて、聞いて、
それだけで毎日充実していたじゃないか!
それを全部、機械が粉々にしていつたんだよ?
僕は絶対に許さない。

家族を殺した機械も、のつのつと生きる人間も絶対に

まるで悲痛な叫び声だった。

リードが片方の手でリラの弦をはじいた。

ワインドも同時にホルンを奏でたが、リラの力はそれの比ではなかった。

地面から飛び出した一本の蔓がミンスとビーナの持っていた銃を奪い取り、

同時に横殴りに一人を突き飛ばす。

風の微妙な変化に気付いたワインドも逃げだそうとするが一歩遅く、頭上から振り下ろされた枝に巻き付かれて身動きが取れなくなつた。

トーンはただそれを眺めている」としかできなかつた。
すぐ近くにリラがあるところに、「奪つ」とも、演奏を止めさせることすらもできなかつた。

トーンはしぼりだすよひじて声を出した。

「ひんなこと、わづやめよ! ゆ…………」

ワインドの悲鳴が聞こえてくる。

遠くに横たわっているミンスとビーナも、生きているかどうかわからなかつた。

何もできない自分が悔しかつた。

音楽を守ると誓ったのに、リードに一度も騙され、結局いいように扱われているだけじゃないか。

見慣れたはずの景色は、まるまるいち方に植物だらけの景色へと変わっていく。

水の透き通つたきれいな川は伸びきつた雑草によつて隠れ、あの時座つていた形の整つた石にはあちこちに苔が生え始めていた。

思い出が壊れていく……そう思つと、涙が溢れて仕方がなかつた。音楽を守れないだけでなく、ビオラさえも自分は守れないのだろうか……。

そう思つたとき、トーンの耳に突然聞き覚えのある音楽が聞こえてきた。

リードも異常に気付いたのか、演奏を止めてその音に耳を傾けた。聞き間違えるはずがないと思ひながらも、トーンは信じることができなかつた。

その音はトーンのポケット、オカリナがしまつてある場所から聞こえてきたのだから。

「なんで君まで、僕の邪魔をするんだ……」

リードの言葉は、トーンにではなくオカリナそのものに向かられているようだつた。

突然鋭い爆発音のようなものが聞こえたかと思ひつと、何かがトーンの頬をかすめていった。

捕まれていた腕がふつと自由になる。

その後ろで、どさりと何かが倒れる音が聞こえた。

リードが肩を押さえながら地面でもだえている。服には真っ赤な血がにじみだしていた。

トーンがすぐ傍にリラが落ちていてるのを発見し拾い上げよつするが、リードの繰り出した蹴りによつて吹き飛ばされてしまつ。

再び鋭い爆発音が響いたかと思うと、

リードじは体を大きくのけぞらせながら地面に倒れていつた。音がした方を振り向くと、

そこには落としたはずの銃を構えたビーナの姿があつた。

トーンは今度はしつかりとリラを拾い上げた。

見た目よりもずっと重たいように感じたのは、きっとリラの重さだけではないからなのだろう。顔を上げると、茂みの先に近づいてくるウィンドの姿が見えた。後ろを振り返ると、すぐ傍まで来ているビーナの後ろに、立ち上がろうとしているミニスの姿も見えた。みんな無事なようだ。

リードの傍で足を止めたビーナを見て、

トーンはぎょっとして二人の間に割り込んだ。一瞬でも間違えれば、トーンのお腹に風穴が一つ出来上がっていたかもしない。

だがビーナはもともと引き金を引くつもりはなかつたのか、構えていた銃を地面に落とし、全てが終わつたことを知つて声を上げて泣いた。

しかしトーンが振り向いたときには、もうそこからリードの姿はなくなつていた。

大陸の半分近くが植物によつて破壊された大地の真ん中で、二人の吟遊詩人はそれぞれの楽器で音楽を奏でた。あちこちに広がつた植物には色とりどりの花が咲き乱れ、葉のささやく声が耳に届いてくる。

木々の氾濫から逃げ出していた動物たちが流れてくる音楽に惹かれるように戻ってきて、

空に浮かぶ大きな太陽が全てを祝福するようにと照り輝いていた。

ウィンドが口を開いた。

「コトヤマがいるんだ？」

トーンも同じ」とを考えていた。

わざと誰もが、これを壊すことを探るでいるだらう。

「僕が持つていていいんだけど、いいかな。

リードは、血の繋がっている人であればリラの力を扱うことができるところだった。

だから心配はないと思つんだ」

周りから反論が上がつてこないことを確認して、みんなの代弁をするよつてこつた。

「いいんじやないか。

君に演奏してもらえれば、ビオラも、リードも本望だらう

ミスが誰にこつでもなくこつた。

「機械に依存する生活はこれからもきっとなくなる」とはないだろう。

そんな中でも、これから誰もが自由に楽しく音楽を奏でられるよう

機械と音楽が共に仲良くなつた時は、リラの音楽を聞かせにきてほしけない。

再び私たちが盲目になつた時は、リラの音楽を聞かせにきてほしい。

やつして道を踏み外すことなく、お互に歩んで行ければいいと思つ

「リードを撃つたとわ……」

ずっとと考え事をしていたビーナが口を開いた。

「私の心中に、彼の苦しみや痛みが入ってくるのを感じました。リラは、その気持ちを他のみんなにも伝えられる楽器だと思います」

トーンは両手に抱えたりラを見下ろした。

胸にすっぽり隠れてしまいそうなほどに小さなその楽器は、様々なものを失つて一からの出発となつた今のダイヤグラム大陸や人間たちの姿を表しているように見えた。

弦をはじけば聞き入つてしまいそうなほど美しい音が放たれる。

壊れてしまつた様々なものを元に戻すのにも、音楽と機械が共存していく方法を考え出すことにも時間はかかるかもしれないが、こんなに小さな楽器でも人を魅了させる力を持つているんだ。この大陸に住む人々が、人同士でなく大陸とも心を一つにして取り組んでいけば、いつかきっとたどり着けるはずだ。

トーンはリラを足下にそつと置いてからサンザの作ってくれたオカリナを取り出し、ふつと吹いてみた。

音にあわせるようにリラからも音が放たれる。
それはまるで、ビオラとワードが一緒に歌っているかのようだった。

リードは最後の力を振り絞つて森へと戻り、その後動物たちに連れられて、

トーンと一人で過ごしたあの二つの切り株が並ぶ場所に横たわった。もう一人で立ち上がる体力は残されていない。肩と右胸から、少しずつリードの命がこぼれ落ちていた。

トーンの座っていた切り株の前に、砕けたオカリナの破片が飛び散っている。

「ジオラ……僕は君を救うことができたかな。

彼と一緒にいたいという願いを、叶えてあげられたのかな……」

薄れゆく意識の中で、どこからかオカリナの音楽が聞こえてきたような気がした。

そして、あの音楽に嫉妬していた自分に気付いた。

涙を流したのは、母が死んだとき以来かも知れない。もつと早く彼と知り合っていれば、自分は違う道を歩むことができただろうか……。

「君みたいになりたかった」

安らかな顔で、リードは動物たちに見守られる中、息を引き取つた。

五年後、少しずつ世界に活気が戻り、植物によって破壊された区域にも、再び人が住みつくようになった。

しかし、決して無駄に自然の資源を削ろうとはせず、人々も前のような技術だらけの、機械にまみれた世界を望もうとはせず、

質素な生活を求めるようになった。

自然が怖くなつたのかも知れない。

また仕返しがまつているかも知れないと。

だが理由はどうあれ、おかげで質素な生活でも十分に幸せに生きていくことこそ、

全員が気づき始めていた。

心地良い空気の流れ、風の匂い、太陽の恵み……そして何より、木々や動物、虫が奏でる自然の音楽は、いつまでも耳に残り、荒んだ心を洗い流してくれた。

機械はなくなることはなかつた。

しかし、人々は機械に音楽を取り込み、音楽による空気調律の回復を同時に行うことでの、

自然と上手く付き合つていく方法を発見したのである。

トーンは今田も、いつものようにビオラの木の下でオカリナを吹いていた。

枝にとまつった小鳥がさえずり、さわやかな風がトーンの頬をなでて木の葉っぱを揺らして去つていく。

心地良い自然の香りが辺りを包み込んでいる。

その足下で、オカリナの音に呼応するようにリラが音を奏でていた。

「君にも見せてあげたかったな。ここからの風景を」

時の経過のせいか、ビオラの口元が微笑んでいるかのように変化していた。

だがそれに、トーンは気付くことはなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0183e/>

音楽を奏でて

2010年10月10日15時18分発行